
なんでやねん！

B G L

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

なんでやねん！

【Nコード】

N9105X

【作者名】

BGL

【あらすじ】

平穏な日常を愛する高校二年生の天堂陸。

だが穏やかな陸の日常は、陸への恋心を燃やす幼馴染みの少女綾崎紫苑と五年ぶりに再会したことで、愛と情欲と陰謀が渦巻く日常に激変する。

財閥の令嬢である紫苑は、その可憐な容貌で綾崎グループのCMや雑誌で活躍中。その渋い若武者口調と男らしい性格で大ブレイク。

紫苑曰く乙女ザムライ。

紫苑は陸の恋人になるため、次々に愛 作戦（ラヴ オペレーション）を実行！

夜這い、甘言、無理矢理、監禁、虚言、色気、脅迫など。

そこへ、紫苑の婚約者にして世界有数の財閥の息子のアレックが参上。

三つ巴の恋戦が始まる！

この物語は、恋に狂った二人の富豪と、平穩を愛する庶民が激動の三角関係を繰り広げる疾風怒濤の恋愛ギャグである。

* 小説 & 投稿屋に投稿した作品を加筆修正しています。

プロローグ

てんどうりく
天堂 陸

夢を見ているのが不思議とわかった。
微妙に思い通りにならない体や意思。そして、ふわふわと捕らえどころのない曖昧な感覚からわかる。

今回の夢は忘れもしない……小学校六年生の頃のある別れの記憶。

それは晴れた昼下がりの午後だった。

近所で有名なほど大きい家……というより屋敷に住んでいる幼馴染みの少女が、両親の仕事の都合でアメリカに引越す事になった。

家の周りには少女の両親が呼んだ引越しの業者の人達が、忙しく荷物をトラックに運び入れている。

そして 視線の先には恐ろしく整った容貌をした少女がいた。

流れるように艶を帯びた天然の茶髪は背中まであり、一度視線が合えば吸い込まれそうな黒瞳が印象的だ。鼻筋のラインは綺麗な一言に尽きるし、形の良い唇は視線を逸らせなくらい可憐さに満ちている。

まだ幼さを残すものの、もう数年もすれば、きっと誰もが褒め称える美人になることは間違いないと思う。

ブラブの恋人同士になるうという私の計画があああああつ！しかも、アメリカ！？ そんなの意思の疎通とかはかれないじゃないかあああつ！ しいていうなら作文書こうと思って本の題名書いて、自分の名前書いて、さあ、書くぞ、と思ったら何にも書かないうちに、物理的法則を無視して、一行目の二マス目にいきなり句点うたれて、終わりって感じじゃないかツツツ！」

紫苑の全音量をもってして告げた恐るべし愛の告白に嬉しいと感じつつも、どこか素直に喜べない自分がいることに気が付く。

「というか無理矢理押し倒して、なぜラヴラヴになるんだ！？」

「な、何言ってるのか俺よくわからないよ！？ それに、ちよつと声のトーンを落として冷静にだな……」

「なんで、陸はそんなに落着いていてすごさるか！？」

尋ね返す紫苑の声は、雲を裂く稲妻よりも鋭い。切れ味抜群だ。

こんなんで髭剃りをしたら、きつと両頬は血塗れになるだろう。

紫苑の心は不可解の三文字に縛られているのか、先程よりも酷く暴れだす。

ウサギのぬいぐるみの耳に歯をたてながら、壁にウサギのぬいぐるみを押し付け、そのボディに連続で拳を打ち込み、捻り込み、鋭くえぐるようにダメージを与える様子は目を反らしたくなるほど「む、むごい」と戦慄と共に絶句するしかない。

ウサギのぬいぐるみに命があるなら、悲鳴を上げていることは間違いがなかった。

そして 突然、紫苑はウサギのぬいぐるみをいたぶる手を止めると能面のように無表情な顔つきでひっそりと呟く。

「縛り付けて、無理矢理車のトランクに入れて、アメリカに連れて行こうかな…… 空港に着いたら、そうだな…… あのポストンバックの大きさなら入ることができるだろう」

誰をとば聞かない。わかりきっているからだ！

「お、おおお、おおお落着けよ紫苑ツツ！ 一生会えない訳じゃな

いだろ？ な？ な！？ なぁッ！？」

小学生の俺は必死の形相で、危険な笑みを浮かべている紫苑の肩を揺さぶって説得する。

小学生にして、俺は生か死かの究極の状態に追い詰められていた。「むっ……そうか？」

疑わしそうな視線だッ。全然信じていない目だ！ 狂気が宿った瞳だ！！

「そうだよ、そう！ そうに決まってるじゃないか！」

悩む素振りを見せる紫苑に一気に畳み掛ける。じゃないと、俺は死ぬ。死んでしまう。

「そうだな……」

「そうだよ！」

紫苑が納得した顔で頷くのを確認して、俺は安堵の笑みを……

「アメリカはキスを挨拶代わりに頻繁に行うらしいし、恋愛のほうも進んでいると聞くからな……ラヴの勉強にはちょうど良いかもしれぬ、なっ！」

凍りつかせる！？

確かにこの紫苑という幼馴染、転んでもただでは起きない所がある。

全身の血液が凍るような錯覚を覚えてしまう。

「フフフ……！ 待っている陸ッ！ 私はアメリカで恋の武者修業をすることに決定多数で、大決定だッ！」

ビシリと右手の親指を、俺の鼻先に突きつけて紫苑はのたまう。

その瞳には、燃え盛る恋の野望が見えた。それはもう天下布武を唱えた織田信長はこんな眼をしていたのかと思うくらい。

「そう、再び陸に相見するその時は、私は天下無敵の乙女ザムライとなつて、陸を何て言うか、いただきますだ！ 押し倒すだ！ 無理矢理だ！ 陥落で愛の奴隷だ！」

「ご近所の人々に響き渡るくらい声高に宣言する紫苑に、俺は乾いた力の無い笑いをするしかなかったわけで……」

第一章 穏やかな日常よ、さよなら

堂家

天

堂陸

《天

「んっ……んーん………」
瞳を開けると、見慣れた自分の部屋が瞳の中へと、飛び込んでくる。

暫く呆けたように、視線の先にある部屋の白い壁を見ていた。

「ゆ、夢……か……?」

呟いて、ようやく思考が鮮明になってくる。

手に抱えていたクッションを布団に置き、ベッドから抜け出した。俺には妙な癖がある。

それは、寝ていると無意識に近くにあるものを抱きしめてしまうというものだ。

「ん~~~~~……っ」

二、三度大きく伸びをすると、ついさっきまで見ていた映像を脳裏に思い浮かべようと、頭を働かせる。

大きく息を吐いた。頻繁と言っほどではないけど、数週間に二、三度くらいの頻度でよく見る夢。

詳しい内容まで覚えていないけど、懐かしい中にも衝撃的要素が

かなり伴う幼い頃の記憶……。

少し気だるげに前髪をかき上げる。

「……暑いな」

時計を見る。そこに表示されてる時刻と温度を見た。

クーラーの冷気が消えた室内の温度は、28 を表示している。

窓を閉め切っていることと暑さを増してきた日差しのせいで、室内は蒸し風呂になりつつある。

窓辺に立ち寄り、勢いよくカーテンを開いて窓を開け放つ。

季節は夏。

網戸越しの外の世界は、朝からギラギラと暴力的に太陽が輝いている。

窓越しに聞こえる蝉の大合唱が、夏独特の雰囲気を運んでくる。

夏の太陽を直視してしまい、思わず目を細める。今日も暑くなりそうだ。

学校は夏休みに入り、部活もバイトもしていない俺はのんびりとした夏を過ごせそうだった。

自然と唇が笑みの形を作るのを感じる。

透き通った青い空。鮮やかな白い雲。蝉の鳴き声。唐突に初夏の涼風が駆け抜け、窓に吊るした風鈴が軽やかな音色を響かせた。

何といつても身体中に降り注ぐ、太陽の暑い日差し。

これらを素直にいいなと感じられる穏やかな日常。

それを俺は大事にしていた。

「……午後から図書館に夏休みの宿題でもやりに行くかな」

自分の部屋にある出窓の棧に腰掛けて、青空を見上げる。

夏の雰囲気を一時楽しむと、洗顔を済ませてリビングへと向う。

その途中で共通廊下の壁に掛けてある伝言板を見る。

「母さんは買い物で、海は、本屋……か」

海とは俺の双子の弟のことだ。現在同じ高校に通っている。

クラスは別だけど、隣のクラスなので体育とか一緒だし、休憩時間も一緒にいることが多い。

リビングにある壁時計は自室で見た時刻から十分ほど時を進めており、午前十時半に差し掛かっていた。

食卓に置かれていた食パンに、いちごジャムをつけて食べると、何気なしに食卓の上にあったテレビのリモコンを手に取り、テレビの電源のスイッチを押す。

アナログ放送が終わり、地デジの開始と共にブラウン管のテレビから液晶TVへと買い換えた。

分厚さがなくなり、薄型のテレビは綺麗ではあるが、なんとなく頼りない気がするのは俺だけだろうか。時代の流れと共に何もかもが変わっていく。

変な物悲しさに囚われていた俺だったが、浮かび上がった映像を見て口を止めた。

テレビにはさつき夢の中で出てきた少女　紫苑がCMに出ていた。

正確には夢の頃の小学生の外見とは違い、俺と同じく十六歳の姿でだ。

昔と違い、少しシャギーの入った大人っぽい印象のショートカットのヘアスタイル。

小さい頃よりもずっと綺麗に女性らしくなった美しい容貌は、多くの者を魅了して止まない。

だが、まあ……

『恋する女子にお勧め！　愛しきあの者の心を手にせよ！　いつもおぬしの唇を私に独り占めさせてくれぬか！？』

桃色の口紅の宣伝をする紫苑の性格は、どうも昔と変わっていないみたいだ。

ところが、この紫苑の普通の女の子と違う独特の性格……つまり

見た目は清純派美少女なのに、性格は竹を割ったようなさっぱりとした気質に若武者口調というアンバランスな魅力が、大衆に人気がでている。

今では綾崎紫苑と言えば、芸能人並みの知名度の高さを獲得していた。

CMに出ているわけは、紫苑の祖父 綾崎秀士氏にある。

彼は巨大複合企業経営者の社長で、様々な経営に着手している。

そのため彼の事業のイメージアップの一環として、孫娘である紫苑がCMや雑誌などに出ているという訳だ。

日本人とは違う垢ぬけたファッションセンスが女子高生に受けていて、女性用のファッション雑誌やクラスの女子の間で紫苑の名をたびたび耳にすることがあった。

少し寂しげな笑みを口の端に刻む。

昔は幼馴染みと言う関係だったけど、今は元幼馴染み。仲の良かったとは言え、おそらく小学校の幼馴染みなんて紫苑はとうの昔に忘れてしまっているだろう……。

それこそブラウン管のテレビが徐々に各家庭から消えていくように、彼女の思い出の中の俺も消えてしまっているに違いない……
事実、引越してから紫苑から手紙や電話の類いはなかった。

怒りはない。

あるのは何か胸の奥が寂しいような悲しさだ。

テレビの電源を消すと、食欲を失っているものの、食べかけの食パンをほうっておく訳にもいかないので、強引に残りの食パンを口の中に入れる。

いつもの甘さをどこかに置き忘れてしまったような……空虚な味がした。

食べ終わると、図書館に行く準備をする。

藍色のジーンズを穿くと、肩から袖の部分がミリタリーの柄がプリントされた黒のTシャツに着替える。

それから洗面所に向くと、寝癖のついた髪を水で軽く整える。当

然の如く正面の鏡に映る己の顔。

父さんに似れば男らしい容姿になったのに……そう思う中性的な顔立ちをしている。

しかも、声変わりがすんでもあまり低い声にならない。

パツと見て一瞬、男か女か判断がつかないと友達は言う。

言動や服装、雰囲気からで男と判るらしいが……それはつまり、少し女の子っぽい服装をすれば、ボーイッシュな女の子と思われるということだ。

だから女々しいと言わないまでも、男らしくない自分の容姿があまり好きではない。逆に父さんのように男っぽい容姿に憧れてしまふ。

ため息を一つつく。容姿のことなんて考えたって仕方がないことだ。

「行くか……」

それから勉強道具をバッグに入れて、外に出ようと玄関まで来た瞬間のことだった。

プルルルルル……。

「あ、電話か……」

慌てて履いていた靴を脱ぐと、共通廊下に置いてある電話を取るために、来た廊下を戻る。

プルルルルル……。

急いで電話機に向かうと、受話器をとった。

「はい、天堂ですが」

「……………」

返事をする、相手は沈黙を保ってくる。

絶え間なく、何かのアナウンスとかが聞こえてくる。駅だろうか？

『……陸か？』

受話器から俺と同年齢くらいの少女の声俺の名前を呼ぶ。綺麗な声だ。けど内心の芯の強さが滲み出た凜々しい口調。

ドクッ！

(この声……！？)

心臓の鼓動が大きくはね上がるのを感じた。

電話の相手は、さっきテレビのCMで聞いた少女の声に……似ている気がした。

「……………ッッ」

にわかに信じられない現実を眼前に突きつけられ、声なく固まってしまう。

『陸じゃ……ないの、か……？』

「あ、はい、そうですが……」

不安な思いを感じさせる声に反応して、戸惑い一つも慌てて返事をする。

けど俺の戸惑いは、少女の怒声にかき消された。

『遅い、遅い、遅い、遅いぞ、陸！』

「す、すまん……？」

謎の少女の剣幕に反射的に謝罪してしまう。い、一体何なんだ？ 『全く、どうしてすぐに返事してくれないんだ！？ 凄く怖かったではないか！ だが、まあなかなか男の色気に溢れる声になったな陸！ 私の乙女回路はピュアにドキ ドキと言う感じで……………?? のわああああああああッ!??』

少女は語気荒く続けたかと思うと、突然、鼓膜を破らんばかりの驚愕の叫びを上げた。

「ど、どうしたんだ？」

キーンという耳鳴りの音を抑えて尋ねてみる。

『いかん、テレフォンカードの度数がみるみる減ってるでござる！
？ うなぎ下りだ！』

「う、うなぎ??」

『と、とにかく国際空港にある噴水の側で待っているから、早く迎えに来てくれ。以上、通信終わり』

ツー、ツー、ツー……。

電話の音が、虚しく俺の鼓膜を打つ。

虚しく？

いや違う。これから何かが起きるような、そんな合図のような運命の鐘にも似た音で鼓膜を叩く。

まるで夏の夕立のような集中豪雨の如く言葉の前に、俺は一言も言い返すことができなかった。

それはあの小学生の時の、なつかしいやり取りを俺に呼び覚ました。

受話器を元に戻す。

電話をかけてきた少女の正体はだいたい見当がついている。

あの若武者口調。激しい性格。妄想癖の思考回路。意味不明のスラング。

「はは……嘘だろ……」

思わず口元を押さえる。

期待と困惑。喜びと不安。それらが嵐のように胸に去来する。

たった一つわかったことがある。

今をもって穏やかな日常が遠のくという変な確信がある……！

第二章 乙女ザムライ参上！

国際空港

噴水ロビー

あやさきしおん
綾崎紫苑

私の名前は綾崎紫苑だ。気軽に紫苑ちゃんと呼んでくれ。でも紫苑と呼び捨てにできるのは陸と私の血縁者だけだ。そのあたり、気をつけてくれ。

私は恋愛の初期段階である中学校時代を無念にもアメリカで過ごした。

だが、私は転んでもただでは起きない。

私は私を転ばした相手を一緒に引きずり倒してすぐさまマウントポジションを取るくらいのことにはする性格だと自負している。

ばっちりとアメリカでできた友とラヴの勉強をこれでもかー、つてなくらいで、ごつつあんですと言っ具合に修業してきた！

「フフフ……抜かりはないぞ」

サングラスを右の人差し指で押し上げて、自信気に笑う。

ちなみにサングラスをしているのは、ずばり格好つけているからだ。私は形から入るタイプだから、何だか企んでる感じがしてイイ感じだと思っからだ。

むしろ、抜かりがあつたのは私の家庭の事情だ。

恋愛の本場である高校時代に意気揚々と帰国する予定だったが、敬愛するお爺様との間に問題が生じてしまった。

「納得できるものか……」

胸中から湧き上がってきた苛立ちを、唇を噛み締めることで抑えつける。

バックの中に収納されたウサぴょんこと、ウサギのぬいぐるみに拳を叩きこみたい気分でござる。

(気分を落ち着けるには……)

陸の成長をリアルタイムで記録してある写真集(小型携帯バージヨン)を、胸の内ポケットから取り出す。

バリエーションは制服、私服、寝巻き、体操服など豊富な上に、陸の様々な嗜好から、交友関係まで網羅した完璧な陸攻略本!

陸の写真集を早速開き、光速で悶絶する!

せ、世界はバラ色に包まれているッ!

「なんと凛々しいのだ、陸は!」

思わず感激と興奮が口から衝いて出てくる。

さらりと女性のように艶やかな黒髪。切れ長の二重瞼。凛々しく整った鼻梁に、男の色気に誘われてつい重ねてみたくなる唇。引き締まった顎のライン!

どちらかといえば、中性的な感じが漂う美人　それが天堂

陸だ!

もう、何ていうか悶絶プリティイ百年殺しだ!

「む、胸キュンだ!　最高でござる!」

思わず流れた《よだれ》という名のラヴのほとばしりを、右手の甲の部分で拭う。乙女たるものいつでも身だしなみは大切だ。

だが、陸の二枚目な容貌だけに私は惚れたわけではないぞ。

惚れた大きな理由は、陸の真面目で優しい性格だ。ひたむきで真摯な態度も私の心に好感触だ。

電車でご老人に席を譲ったり、困った人をほおって置けなかったり、陸は様々な善行をしている。

クラスでは友人も多いし、学校の成績も校内十位に入るほどの優秀さだ。クラス委員も務めているんだぞ!

ちなみに、身長172?。体重60kg。血液型・O型だ。

なにせ綾崎グループの技術の粋を集結して造られたものだから、その内容の満足度は万歳無敵天下統一だ！

そう、ラブのためならここまでやる。その根性こそがアメリカで磨いてきたもの。

これぞ、紫苑ちゃん七つの大技の一つ《乙女ラブ魂》！

愛しい者を想う時間こそが、乙女のラブを育てるのだ。

そして、私は陸を想い続けてきた。この想い、そんじょそこの乙女には負けぬと断言できる！

握力60超えの右手をぐつと握り締める！

（そう、私は満身の力をこめて今まさに殴りつけんとする握り拳だ！）

この暑い夏に負けぬ熱さで、私は陸を口説く！ 陥落させる！

完全服従だ！ 調教レベルマックスのCG率100%だ！

もう何て言うかメロメロだッ！ 容赦無用の必殺必中の無理矢理だ！

必ず私を好きだと言わせてみせる！

でないと……私は……綾崎家の運命　―お爺様との約束を守らなくてはいけなくなる。

（何としても陸に……ッ！）

瞳をラヴ色に燃焼させる。私の小宇宙は今、無限の高まりを見せている。小宇宙が燃え上がる時、不可能は可能になるのだ。

かの英雄も言ったではないか。

「世の恋愛に不可能と制限はない、と！」

カッと瞳を見開き、私は未来を視る！ 薔薇色と虹色に輝く絶対無敵の未来を！

私を抱きしめて口付けをして熱烈な言葉で私を口説く陸を妄想をしながら、私はラブ必勝の決意を心に刻み込めた。

「マジやばいな……」

期待が現実になり打ちのめされた時、人はこんな絶望を吐きだすのだろう。

少年の幻想が打ち壊された時、少年は大人へとなるのだろうか。ならば、俺は大人になどなりたくなかった。

後悔に瞳を閉じ、少し前の自分を止めたくなくなる。

ようやく空港に着いた俺は噴水がある場所を空港の係員に尋ねた。それから噴水のある空港ロビーへと向かい、目的の少女を探して周りを見渡す。

まず、視界に入ったのは、見事な意匠をこらした噴水だった。見ていると、なんとなく涼しげな感覚に捕らえられる。

「……と……やばっ、早く探さないと……」

我に返ると、周辺を見渡す。あたりには人を待っている人たちがたくさんいた。ビジネスマン、女子大生、子連れの母親、カップルなどなど。

これだけの人の中から電話の相手を探すととなると、少し面倒なことになりそうだった。

「これじゃあ、見つからないかもしれない……」
ため息をつく。

ここで電話の相手を見つけないのは不可能に近い。空港のアナウンスなどを使ったほうがいいかもしれない。

と
アナウンスの音が右の方から聞こえて、何気無く右の方を見た。

世界が切り取られたように停止したかのように錯覚した。

鼓動が高鳴る。血潮が震えた
そこには……そこには俺と
同年代くらいの少女がいた。

サングラスで目元が隠れているが、整った鼻筋や形の良い唇からかなりの美少女と推測できる。

少しシャギーのはいつたショートカットの髪。

テレビや雑誌などでも、滅多に見ることができない美しい少女がそこにいた。

薄いピンクのミニのシャツの裾は短く、そのせいで白いお腹が見えているのが眩しい。

豊かにシャツを盛り上げる胸の辺りにはLOVE&CRAZYのロゴ。大胆に白い太股を露出させて膝上でワイルドにカットされたジーンズ。

カジジュアルなスタイルでボーイッシュな雰囲気なんだけど、それとは逆にスタイルはかなり……そのなんだ……思わず目がいつてしまふ胸の膨らみといい、くびれた腰といい均整のとれた女性らしい体つきをしている。

思わずその少女に見惚れてしまっだろう。

そう、だろう、だ。

少女が普通に佇んでいるなら、俺は見惚れていたかもしれない。

本当に鼓動が高鳴る。血潮が震えた

ドン引きで。

「マジやばいな……」

少女はその可憐の容姿にまるで似合わないオーラを周辺に醸し出していた。

短的に言おう。

少女は、身悶えしていた。

少女は完全に妄想世界に　　あたかも初めて覚醒剤を使用した麻薬患者のようにのめり込んでいた！

口の端に少し涎をたらして虚空を見上げながら薄ら笑いをしているかと思えば、突然、恍惚とした表情で自分の体をかき抱くようにして身悶える。

少女の体からはドスピングのオーラが陽炎のように噴出していた。そのせいで、少女の容姿の良さに惹かれた男性たちも、その異様なオーラに「うおおおっ!？」みたいな感じで躊躇して、ナンパと云う行為に移せないようだった。

(今なら逃げれるッ)

俺の中の危険回避を司る神経が全力で警鐘を鳴らしていた。

それなのに。

そんな気持ちとは裏腹に、不思議と体は少女の方に動いていた。

まるで闇の中に浮かぶ光源を求めるように。

まるで懐かしさに引き寄せられるように。

まるで　この時をずっと待ち望んでいたかのように。

破滅するとわかっていても踏み出してしまう……この感情はなんて説明していいのかわからない。

戦いの前に恋人や家族のこと話す一兵士の気分だ。それ死亡フラグとわかっているのに口にしてしまう。

(だって口にしないと、セリフなしの一兵士として終わってしまうじゃないか！)

そんなわけのわからないことを考えてしまう。

あるいは蛇に唆されて禁断の果実を口にしたアダムとイブはこんな気持ちだったのだろうか？

と、不躰な俺の視線と接近に気が付いたのか、少女が不意に俺の方を物凄い勢いで振り向く。

それはさながら獲物を見つけた肉食獣の如く。

「!?!」

失敗の二文字が頭を通り過ぎ、続けて手遅れの文字が赤点滅する。予想が確信に変わった際の衝撃を受け、少女を凝視する。

その少女は俺がよく知っていた幼馴染みに、やはりよく似ていたから……

しかも、俺の目と耳の錯覚かもしれないが、一瞬……少女の口元が、「りく」と俺の名を呟いた気がした。

俺の顔を見ると、少女は喜色と安堵を顔に浮かべる。

その笑顔に既視感を感じた。景色とかで体験したことがあったが、人を感じるのは初めてだった。

「紫、苑……?」

少女を見て呟く。

その声は空港の喧騒の中ではあまりにも小さく、情けないくらいに掠れていた。とても少女の元まで届いたとはとても思えない。

情けないことに彼女を目の前にして、探るべき行動を探しあぐねていた。

行動は少女が先だった。

「陸!」

俺を呼ぶ凜とした声。

いつもそうだった。

迷い惑って立ち止まっている俺と違い、彼女は迷わないしブレない。いつだって真っ直ぐ前を見て走り出すんだ。

一直線に走るその背中が眩しかった。だからいつもその背中を見失いように追いかけていた。

まるで翼が生えているみたいに軽やかに、その可愛い容姿と相まって彼女は天使のようだった。

「もう我慢できないッ！」

そう天使のよう《だった》んだ。

どこぞのモーニングのコーンフレークのゴリラの如く。

発情期のゴリラって危険じゃないの？ そんな疑問がぼんやりと浮かんだ瞬間だった。

「陸！ 陸陸陸ー！ーッ！ 好きだ、ラヴだ、抱き締めたい！」

さあしよう！ すぐにやろう！」
その疑問はすぐにわかると思った。嫌になるくらい。

（ああ、なのに……！）

危険ってわかっているのに！

俺という生き物は 自分の名前をあの頃と同じ温かさで呼ばれ、懐かしさと嬉しさで心臓が一際大きく刻むのを感じてしまった。

だから逃げ出せなかった。

少女は 紫苑は荷物の薄紫のボストンバックを空港の床に置いたまま、俺だけを一直線に視界に捕らえ、駆け出して来て、そして その一瞬の郷愁と愛しさと懐かしさが致命的であった。

「ごぶッ!？」

気が付いた時には紫苑に押し倒されていた。

呆然としていたせいで彼女の勢いを耐えることができずにいや身構えていたとしても屈強なラグビー選手数人がかりでも止められたかどうか。猛牛ですら押し倒す勢いのタックルだ。プロラグビーの選手にスカウト間違いなしの強烈さは、胃の中の食パンが喉の奥まで出てきたのが物語っている。

ラグビー選手でもない俺が猛牛と化した紫苑を止められるわけもなく、紫苑を抱いたまま空港の床に背中から押し倒される。

「いてて……うッ!?」

現金なもので、痛みは未体験の感触に忘れてしまう。

隙間なく抱きつかれて、その時初めて俺は女の子の身体とは凄く華奢で柔らかいんだなと驚いた。

ひどく軽くて、乱暴に扱ったら壊れてしまうような脆さが手のひらを通じてぬくもりと共に伝わってくる。それと同時に凄く心地の良い感覚と強い存在感が、呆然とする俺の身体にダイレクトに伝わってきた。

「……し、紫苑なんだよな?」

恐る恐ると言う感じで、胸の辺りに頬をぐりぐりと頬ずりし続けている女の子に尋ねる。

「うむ! 帰って来た紫苑ちゃんだ。……久しいな陸」

顔を上げてサングラスを外すと、鮮烈な双眸と出会う。

ああ、そこには紫苑がいた!

小学生の時に別れ、美しく成長した幼馴染が……洗練され美しさを増した容貌。でも確かに子供の頃の面影を見つけて胸が熱くなる。生き生きと活力に満ちた黒瞳は、至近距離で見れば吸い込まれてしまうほどの輝きを放っている。

花の綻びを思わず可憐な微笑みを紫苑は俺に向け、

「乙女ザムライ参上だ!」

そう言っ て俺に笑いかけた。

第三章 動き始めた乙女の夏

《天堂陸》

胸の中の紫苑の存在が信じられなかった。

まるで真夏の大きき大気が生み出した陽炎のように存在は鮮明なのに、掴むことのできない不確かさ……そんな感覚を目の前の少女に感じていた。

実を言うと紫苑に会って、喜びよりも戸惑いの方を多く覚えていた。

普通は喜ぶだろう。なにせ幼馴染みがアメリカから帰国したのだ。それも自分を 俺を覚えていてくれた。

そのことに対する嬉しさ。それは空港で紫苑を見た瞬間感じた胸一杯に広がる歓喜。

それが裏付けている。

けど、歓喜が過ぎた後に来たのは戸惑いだ。

戸惑いを覚えた理由は紫苑の《今》にある。

朝見たCMが頭を掠める。

そう 紫苑の祖父。

つまり祖父の綾崎秀士は世界的に有名な巨大複合企業経営者の社長だ。色々な事業に幅広く手をつけている相当な資産家 iya やそんな一資産家という小さい枠に彼をくくることはできない。

綾崎財閥の総帥である綾崎秀士。紫苑はその孫娘だ。

俺と紫苑は今こんなものにも近いのに、突如見えない巨大な壁が立ちただかった気がした。

『見上げるような世界』

確かに昔の紫苑の家は俺の家に比べてかなり大きな家だった。俺の家の数倍は軽くあったと思う。屋敷というような豪邸に公園かと思紛うばかりの広い庭があった。

けど、昔はそんなことはどうでもいいことだった。

富豪と庶民の世界の違いなんて全く気にならなかった。

『今、目の前にある巨大な現実』

けれど、今はもう理解してしまった。

事業拡大のせいで生じたアメリカへの引越し。それによる紫苑との別れ。流れていく五年という年月。

紫苑と離れていた五年間の歳月が俺に理解させてしまっていた。

その歳月は分別のない少年を、世の中のことを諦念混じりの理解ができるような青年へと変えていた。

社会に生きていく上で縛られる『常識』と言う名の鎖。年を重ねるにつれて、隠す事を余儀なくされる感情。廃れていく情熱に、蓄積していく虚無。

『知らなかったことを気が付くのは、必ずしも良いと言えない事実』

そして、紫苑と自分との違い。
それはテレビのCMや新聞などで、克明に慈悲なく圧倒的な脱力感を持って俺に伝えてくる。

(『住む世界が違うんじゃないか?』)

叶わぬ夢ほど嫌なものはない。
憧れるだけ憧れ続け、届かず、掴めない夢。求めて膨らんだこの憧憬は一体どうすればいいんだ?

目の前にいる少女は、本当はこんなところにいるはずのない存在だ。

非日常の顕在。それが戸惑いの理由だった。
そんな事を考えながら、俺は五年振りに会う幼馴染みを見上げる。
長い髪は活動的な印象のショートカットになっていた。

(髪、切ったんだな……)

その一言を胸の中で飲み込む。
そんなことはCMを見ていればわかっていたことだ。
紫苑がその長い髪を切った時期だって本当は覚えている。
でも俺はこの時、何を言えばいいかわからなかった。

胸が高鳴る。感動に震えに震えるのは身体なのか心なのかかわからない。

この切ないような苦しいような、それでいて暖かいこの気持ちは
「陸、これは肯定の合図と受け取ってよいのか? つまり寝室のハート型の枕でイエスの選択ということだな? ふっ、そうと決まればムラムラがもう我慢できなくてござる。ほらあそこのトイレでいい。

行くぞ！ さあ行くぞすぐ行くぞ今行くぞ！ 色々な意味でイクぞ
！」

あ、絶望ですね。（乾いた笑み）

五年振りに再会した幼馴染みは、いい感じに振り切れていた。もう常識とかそういうゲージが。

たぶん存在しないんじゃないかな、そういう単語が。

乙女として守らなければいけない絶対境界線の遥か向こうで魔王笑いでいた。

勘弁してくれよ、もう！

「い、一体何をやる気なんだよ！」

「何って、それは陸、ナニに決まっているだろう？」

声を荒らげる俺に、にやりと笑う様は下手に容貌が可憐な分、その威力が凄まじい。

（親父ネタかよ！？）

戦慄する。マジで戦慄する。

その可憐な容姿で、その返しはして欲しくなかった！ 思春期の

少年の憧憬がハイエナに骨まで貪られていくかのようだ！ 痛い、

痛いよ！ 数瞬前までのときめきを俺に返してくれッッ！

紫苑、お前がいましたことは、国民的アイドルの主要メンバーが鼻くそをほじったに等しい行為だとわかっていているのか！？

というか紫苑のтонでもな問いかけでようやく自分達がどういふ体勢にあったか、嫌なくらい気がつかされる！

白昼堂々空港の床の上に仰向けで、紫苑に押し倒されている。

慌てて視線を走らせて見ると、通行人の多くがこちらに好奇の視線を投げかけている。

「うわっ！？ ちょ、ちょっと！ 取りあえず立とう！ 離してくれ！」

紫苑を離し、急いで起き上がるうと……

「否ッ！ 断じて否ッッ！」

思わぬ返しにたじろぎつつも、突っ込みで応戦する俺だったが、
「気にするな。そんなことよりも……ふふふ、嫌よ嫌よも好きのうちでござる」

「一言で切って捨てられた上に、どこの悪代官だよ!？」
ハマリすぎる紫苑の口調と表情に思わず突っ込む。

「だが、まあ安心しろ、陸」
すると紫苑は慈母のような優しい微笑を見せる。そんな顔で笑えばメディアが清纯派美少女という単語を使うのも納得できるから

怖い。

「優しくするから大丈夫だ、フククツクツ、フヒヒツグフフフ
フフフフ!」

「ごめん、最後の笑い声で台無しだから! 黒い本音だ漏れですから!」

「ぬっ」

慌てて口元を隠す紫苑。けど遅いから。致命的に遅いから。人身事故起こした後に無免許だったというくらいに致命的ですから。

「まあ、流石に冗談だ」

「あ、ああ。そうだよな……」

あっさり紫苑は俺を拘束から解放放ち、その態度に勝手だと自覚しているんだけど……失望を覚えてしまう。

（何を自惚れているんだ、俺は? さっきの紫苑の言葉は冗談に決まってるじゃないか……）

知らずうちに紫苑の存在に浮かれていた俺は内心で恥じる。

（俺ってやつは……つくづく単純なんだな）

「私もこんな人の多いところでラヴに持ち込む気は毛頭ない。露出狂ではないからな」

だが、紫苑の発した次の言葉で俺は硬直する。

「ええッ!？」

驚愕の呻きを上げ、落としていた視線を紫苑に戻す。

「じゃ、じゃあ……人気のないところだったら……どうするんだ?」

恐る恐る探るような目つきで尋ねる俺に、紫苑は惹きこまれるような凄絶な艶笑を浮かべた。

「無論、知れたこと」

それはさながら契約を交わした人間の魂を手にした悪魔の如く。麻雀で言うならロンを宣言する寸前の人間の超ドヤ顔に近いかもしれない？

清純な顔つきがどう転べば、このような恐ろしい笑みになるんだろうか！？

美女と野獣の題名が違つとこの瞬間わかった。

美女と野獣じゃないんだ。何で気がつかなかつたんだ、俺は！

（美女は野獣だッ！）

知りたくなかつた真理を悟ってしまい、哲学的電流に身を震わせる。

だが、俺の震えなど紫苑は待つてはくれない。

形のいい唇が、毒電波を高速シャウトする。

「18禁の激甘ラブ ピーチ萌え的美少女ゲームのようなラブに持ち込むに決まつておろうが！

わかりやすく言えば、少年誌ではできないが、青年誌では容赦無用にできることだ！」

「か、勘弁してくれ！？ 最近のトレンドイはR15ですよ！？ つて言うか……冗談……だよな？ だよね？」

さすがのように俺は紫苑へと問いかける。

頼むよ。結構ギリギリなんですよ。これ少年誌ならトゥブルの如く色々見せすぎて少年誌追放デビューですよ！？

そんな俺に紫苑はきりりとした視線を向けて言い放つた。それはもう容赦無用に。

「武士に二言はない！ で、ござる」

その真剣の如く切れ味に満ちた鋭い視線！ マジだ！ 彼女は本気と書いてマジだ！

どこぞの魔球を投げる寸前のピッチャーのようにドス桃色の炎が双眸に燃えているよ。

（このままだと俺は恋の三振打者だ。球場ではブーイング、控えてベンチを温め続け、契約打ち切られる寸前の公園的サラリーマンじゃないか！ とにかく話題を変えないと！）

本能がよこした明確な危険信号。

背筋を絶叫上げて駈け抜けた悪寒に一もなく二もなく飛びついた。「そうだ！ 紫苑お腹減ってないか！？ ほら飛行機に何時間も乗ってたんだろ？ お腹減ってるんじゃないか？」

目を覆いたくなるような不自然な話題のふりかたに引き攣った笑顔を出してしまう。

もうちよつと、まともなことは言えないだろうか、俺は？

もう相手の術中にハマって、何を切るかわからずに出してしまっただ牌が、

「そうだな。腹が減っては戦^{ラサ}ができぬ、と言っしな。ここはたらふく食って力を蓄えるか」

紫苑の上がり牌という……レートが巨額なら「ロンロンロンロオオオオオン！」と脳内分泌が大量に流れるが如くだ。いや、これハネ満跳んで四倍満で役満？ 裏ドラ乗っちゃってます？

お金払えないので採血ですか？

（ぼ、墓穴！？）

それは精神的なものだったけど、まるで身体中がバネのようにたわみねじ曲がって、深い奈落に落ちて行ったような気がした。

まさに自分で掘った落とし穴に落ちた気分だ。切ないも度を越すと、その……犯罪ですよ？

曲がり角の自動販売機でジュースを買って飲んで、戻ったら原付に駐禁で罰金とか、それ酷いよ！ 惨いよ！ 切ないよッ！

この時代、世紀末救世主を望んでいるよ！

誰か取り締まってください。この世の中の切なさを。罰金は仕方ないですけど、せめて良い行いをしたならポイント還元してくれよ！

七十歳から年金支給の引き上げとか……それマジ犯罪ですよ？

なんてどうでもいいことを考えてしまっくらいに、要は混乱していたわけで……俺、どうなるんだろう？

取りあえず……周囲の目が……もう本当に痛いんで……お願い助けてください。

第四章 ラヴゴっあんです 作戦

《天堂陸》

売られる子牛的感觉で気がつけば、空港にあるとあるレストランに入店させられていた。

あのままさらしものになるのは耐えられないところであったから、どこか店に入るのは悪い選択肢ではないように思えた。

だがそれは甘い認識だと思い知らされた。

レストランと言う限定された空間であるからこそ、紫苑の容貌は群を抜いて目立っていた。

ウェイトレスやウェイター。食事待ちの人や、中には食べかけの手を止めて、紫苑に見入っている人もいる。

視線を外せないぐらい美しい容貌。それはサングラスをかけていてもわかるのだろう。

ふとそこにいる利用客の思いが届いたのか、紫苑の顔からサングラスが外される。

誰かが息を飲む音が聞こえたような気がした。

巨大な美を目の前にした時に巻き起こる現象。静かな感動混じり

の吐息があちらこちらで上がる。

ただそこにいるだけで人を惹きつけてしまうカリスマが紫苑にはある。

今、レストランにいる人のほとんどが、紫苑に注目していた。

目立つことが嫌いな俺としては、あまり居心地が良くない。事情が許してくれるなら、今すぐにも背中にも羽を生やしてここから飛び出したい気分だ。

やがて、一人のウェ이터が注文をとりやって来た。

「い、いらっしやいませ、ご注文はなんにいたしますか？」

見るからに緊張しているが、その視線は吸い込まれるように紫苑だけに注視されている。

「……俺はエビピラフを」

「へ？ あ、はい」

そこで初めてウェ이터は俺の存在に気がついたようだ。

おおかた紫苑しか目に入ってなかったんだろう。

(まあ、別にいいけどね……)

独白しつつも、おまけのように扱われては怒るほどではないけど、正直へこむ。

「え、えつと。その、お連れの方は？」

紫苑に見惚れてしまうのをなんとか断ち切るように、ウェ이터は対応を続けようとする。

けれど、その声は哀れなくらいに上ずっていた。

しかし、紫苑はそんなウェ이터を筆頭に周囲の注目にまるで頓着しない。

「私はステーキセット。焼き加減はウエルダンで。料金割り増しでもいいから500gにオーダーカット頼めないか？ あとつけあわせにフルーツサラダ。無論、ライスは大盛りだ！」

レストラン中に響くかと思われる紫苑のハラペコ宣言に俺を始めとした周囲の利用客はテーブルに突っ伏す。

「し、紫苑!？」

悲鳴にも似た声を上げる。周囲のざわめきが嫌なくらい押し寄せてきたのを感じる。勘弁してくれ！

今の紫苑の発言は、皆の抱く幻想という名の固定概念を右手で打ち砕くこと120%だ。

というか、ヒロインが堂々と肉って。しかもとどめに「飯大盛りって……」

「ふ、陸。私の前世はたぶんティラノサウルスだ。そして陸の前世は草食系の動物だ」

「……………」

それは何だ……俺がお前に食べられる運命だと間接的に伝えたいのか？

しかし、言い返せない俺は目をそっと伏せて紫苑のギラギラした双眸から目を反らす。

見ちゃダメだ。見たら勝負始まる以前に決まってしまう確信がある。

ウェイターが「な、なんとかします」と答えてその場を下がったのを見送ってから、気になっていた話題を振ることにする。

決して、紫苑の視線の圧力に負けたわけではない。

「あ、そう言えば紫苑発音が凄いな」

会話の時に英単語が出てきたとき、紫苑の英語の発音が日本人が口にするような和製英語ではなく、さすが帰国子女というのは伊達ではないと思うくらいに本場っぽいのだ。

「まあ、五年もいれば英語など自然と身につくものだ」

特に自慢するわけでもなく紫苑はさらりと凄いことを言う。

実際、紫苑にとって英語を話すことはそれこそ日常のことで自慢するようなことじゃないんだろう。

「そんなもんかな。中学、高校で英語を五年勉強しているけど、簡単な単語や文法なら何とか聞き取れるくらいで、とてもじゃないけどしゃべれないな」

事実、日本の学校の英語を受けていて英語がしゃべれるような生

徒などほとんどいない。

四年近く英語を習っていないながら、しゃべれないなんて……俺たちは本当に《英語》を習っているのだろうかと初めて疑問に思った。

「ふむ……」

俺の言葉を吟味するように聞いていた紫苑は、ポンと手を叩く。

「外国人の恋人が出来たと思って勉強すればみるみる上達するぞ……まあそんなことは私が許さないけど、なッ」

うまいことを思いついたという楽しげな口調で話していた紫苑は、最後の方で一転　　ギラリと瞳を光らせ、語尾の「なッ」ってところを強いアクセントで言った。

それは紛れもない警告……脅しだ。

素早く視線を明後日の方に反らし、お冷を口にする。

結構かなり本気で料理がくるのを待ち望む俺だった……。

暫くして、頼んだ料理　　あれはなんだ？

その肉は分厚かった。大きく、重く、ステーキというにはあまりにも大きすぎた。

それはまさに肉塊だった。

鉄板の上で湯気を立て、暴力そのもののように鎮座している様子はキングオブキング。

その肉を切るといふよりは削るように引きちぎると、一口で頬張る。

ムシャムシャならまだ可愛げがなくもない。

だが、年頃の乙女がガツガツという擬音で肉を食るのはどうだろう、と。

以前、テレビで見たマニヤンガ自然保護区の肉食獣が草食動物に襲いかかる情景がなぜか思い浮かぶ。

気にとれるくらいの剛毅な紫苑の食べっぷり。

これではどちらが男かわからない。少なくとも食べる擬音では、俺は女の子のようなものだ。

その可憐な口に似合わない豪快さとスピードでランチを食い漁る

様子は、少年が美少女に抱く幻想を木端微塵に打ち砕く率、実に120%だ。

幻想に抱かれて溺死する気分はこんな感じなのだろうか？

「ぬおッ!？」

唐突に紫苑は奇声を発して、食べる手を止める。

その表情は大切な何かによろやく気がついたような、後悔と自分への憤りに近い表情を刻んでいる。

「どうしたんだ？ 詰まったのか？」

一体どうしたんだろう？

尋常ではない紫苑の態度に俺は首を傾げる。

「重要なラヴテクニクを忘れていたでござる」

ラブ……テクニク？

ダメな予感がした。それはもう凄まじいまでに。

つうー、と。

一筋の冷や汗を頬に垂らした俺に、紫苑は続ける。

「あーん、と食べ物を楽しめる者に食させることによって好意度を上げ、恋人の座をゲットでござる！」

紫苑はすでに残り三分の一になったウェルダンのステーキの残り全てを、「ぬん！」と言フオークで突き刺すと、肉の欠片と言うより、肉の塊を俺の目の前に向けて堂々と言った。

「あーん」

その光景はひどくときめかなかった。

おそらく、俺の心臓の活動状態を心電図で見れば、まったく平静通りだっただろう。

いや、もしかすると上昇するどころか、下降していたかもしれない。

だって、肉汁滴るこの光景はとても……ときめかない。

まだ見ぬ未来に向けて脱出したいという渴望をひどく感じた夏の

昼であつた……。

第五章 乙女ザムライ ラヴ演技

《綾崎紫苑》

『あーんラヴごっあんです 作戦』も無事に終わり、意気揚々と私は伝票を持って、レジに移動する。

「し、紫苑、俺が払うよ！」

私の行動に陸は慌てて財布を右のポケットから出そうとするが、右手の手のひらを広げることで陸の行為を制止する。

「男に恥をかかせるな」

ニヤリと笑ってみせる。

「紫苑は女の子だろ!？」

「む……男女差別か？」

素早く切り返す。

「さ、差別ってわけじゃないけど……そのやっぱり、何て言うか……」

言いよどむ陸に、天使を彷彿とさせる笑みを意識的に浮かべる。

「気にしなくていいぞ? この紫苑ちゃんにランチを奢られたこと

を一生胸に刻みつけてくれれば、全然構わないぞ。むしろこちらの狙い通りだ。こうして陸に恩を売り、逃げ道を一一つ丁寧かつ偏執的に塞いで私の虜にする作戦の一部だからな。全然気にしないでくれ」

「!?!」

陸はなぜか顔面を蒼白にした。

突然、氷河期に閉じ込められた恐竜のように、激しく体を震わせる。

まるで重大な禁忌を知らずうちに犯してしまった罪人のような悲痛的な表情だ。どうしたというのだろうか？

「絶対、払う!」

「駄目だ、認めぬ!」

駆け寄る陸に、刃の鋭さで陸の主張を切り捨てる。

棒立ちになる陸。その隙を逃さずレジへと猛ダツシユする。素早く福沢諭吉殿を一枚、高速でカウンターに叩きつける。

「娘ッ、釣りはいらぬ!」

「あ、ありがとうございます!?!」

私の剣幕にレジの娘は震えつつ、料金を受け取る。

「で、ですが、お釣りを……」

「ならばその本当にその元に届くかどうかともわからない募金箱にでもいれるがいい!」

「ま、待ってくれ、俺の分は……!」

呆然とした状態から陸は慌てて財布を取り出しつつレジに近づくが、獲物を狙うムササビの如く手首のスナップを使って、陸の口を後ろから塞ぐ。

「ふむうツツツ!?!」

突然の拘束に驚愕の声を上げる陸。

陸の唇の感触は手のひらを通して、私の胸をせつなくムラムラと焦がす。

陸の吐息が私の手のひらをくすぐるのは答えようのない快感だ。

はああ、たまらんツ！

私は特にサドというわけではないのだが、こ、こここ、これ私の足の指をな、なな舐めさせたらどうなってしまうのでござろうか！
(むはあああああツツツ！)

まずいまずい！ 愛しい者に強制する背徳感と征服欲のせめぎ合いが、私の乙女中枢経路にスパークを生み出す。

(取り合えず、あとで手のひらに口づけよう。否、舐めまわそう) そう決意する。

それにしても、ああ、なんと素晴らしい唇なのだ。

いつかこの唇を私だけのものにしてやる。私のもので万歳だ。何と最高なんだ。神様の贈り物に違いないな、うん。

ラヴで緩みきった笑いを口に象りながら、陸を羽交い絞めして、空港のレストランを後にした。

「けどさ、紫苑。これからどうするんだ？」

場所は変わって空港から駅へと向かう改札口周辺。あたりは相変わらずの人込みの密集地帯だ。

「……とりあえず家に行くつもりだが？」

平常心を装って答えながらも、陸の言っている意味は分かっていた。

おそらく、今日どこで宿泊するか聞いているのだろう。

なにせ、以前私の住んでいた家は現在取り壊されて駐車場になっているらしい。

(さて……これからが一勝負というわけだな……)

計画は単純にして絶大。強大にして無比。最強にして完璧。

計画の内容はマル才風に言えば、ズバリ陸の家に転がり込み、こ

の夏の間、陸の心を射止める事にある！

(既成事実さえつくれば、お爺様も納得させる事ができるに違いない！)

つまり、そう言う事だ。

そのためには、駐車場になっっていることは知らなかったということにして、陸の家に厄介になりラブチャンスを掴まなければ……！
「何がって……その……紫苑の家、引越してから駐車場になってるんだぞ？ ……一体どうするんだ？」

「な、何いいいッ！？ 私は家なき子の少女になってしまったって事かッ！？」

証拠がでそろって、にっちもさっちもいかない犯人のような切羽詰まった声で、私は狼狽する。紫苑ちゃん迫真の演技だ！

それは周りの人々が何事かとこちらを注目していることから明白だ。

「そういう事になるけど……」

「ああッ、何てことだ！ 紫苑ちゃんアルマゲトン的大ピンチッ！ 赤信号で飛び出してしまった気分だ！ お子様にも分かりやすく言うならば、ウルトラマンの必殺技のスペシウム光線が怪獣にきかず『これでは地球の平和が……』ってな感じの地球規模級の大ピンチーーンチッ！」

ついでに頭を抱えて、その場で膝を付き、大地に上げられた金魚のように、のたうち回ってみる。第二次成長期の暴走というもので七転八倒、かえるぴよこぴよこみぴよこぴよこ！

「分かった！ とにかくこんなところで暴れるんじゃない！」

陸は周辺の視線が気になるのか、落ち着かなく視線をさ迷わせながら、私に注意を送ってくる。

「では……泊めてくれるか？」

ムクリと、起き上がって陸へと尋ねる。

「分かった！ 本気で、分かったから！ 泊めるよ、泊める！ 泊めればいいんだろ！？」

陸の肯定の返事に立ち上がって、私は両手の親指をビシリと立てる。

それを見た陸は半眼で疑わしそうに呟く。

「何か……俺……騙されてないか？」

「気のせいだ。体育たいいくの二つ目の《い》くらいどうでもいい事だ」

「それは確かにどうでもいいが……」

釈然とせずに首を捻る陸。

言質を取った私は強引に陸の手を取って、駅の改札口へと引つ張って行く。

「何かな……気になるんだが……とても気になるんだ……」

「気にするな。少年よ恋心を抱けだ！」

「……大志だつて」

そう訂正つつこみを放たれながらも、私たちは陸の家へと向かった。陸の手を後ろ手で引きながらデスノのライトばりの笑顔で私は笑う。計画通りだ。

時々、私は自分の才能が恐ろしくなるでござる。

そう、愛しきものを攻略するためのテクニク。

これぞ、紫苑ちゃん七つの大技の一つ《乙女ラヴ演技》！

愛しいものを手中にするためには、悲しいが……優しい嘘をつかなくてはならないのだっ。

今のところ《陸・陥落大作戦》は完璧無敵でござる。スペインの無敵艦隊だ。

いずれラヴという名の海を、我が艦隊が征服しつくす日も近いだろう。

なっははははは！ 吾輩のラヴに不可能はないッ！

第六章 乙女ザムライ買い物をする

《天堂陸》

とりあえず紫苑の話聞いてみると、夏休みの間くらいは俺の家で世話になりたいらしい。

それなら、色々日用品などがいるだろうということ、俺たちは地元駅のデパートへと向った。

それが間違いだつたと……言えなくもない。

「買うものが一つある」

紫苑の荷物をデパートの預かりロッカーに預け終わると、彼女が真剣な表情で俺を見る。

端正な容貌の紫苑が真剣な表情をすると、冗談抜きに惹きこまれそうになる。

「重要なものだ。この戦ではなくてはならないもの。これを身に着けているかどうかで、勝敗は決まると言っても過言ではないものだ」
拳を握り締め言葉を紡ぐ様は、本気の一字に尽きる。

「一体なんだ？」

緊張して尋ねると、紫苑は重々しい口調で言った。

「勝負下着だ」

二つ確信した。

一つは聞いた俺が馬鹿でした！

もう一つは彼女は恋愛バトルマシーンだということだ。しかも危ない方向にこのマシーンは壊れている。大ピンチだ。お子様は真似しちゃいけない。有害指定だ。助けてくれよッ。俺は逃げた

グワシツツ！

だがそれは……猛禽の鋭い爪のように掴まれた紫苑の手を振り解かないと無理な話だ。

「陸の協力が必要なのだ。武士に刀がいるように、紫苑ちゃんには勝負下着が必要なのだ。ほら、あれだバカボンのパパにハラマキがなければ、それただのバカだろう？」

否定したかった。ただのパパになるだけだ、と。そんなことはない、と。

けれど鬼すらも斬り捨てそうな紫苑の鬼気の宿った瞳に俺は……

「そ、そうだね……」

ああ、俺を馬鹿にしてくれていい！俺は主体性のない日本人だ。駄目な男さッ！

「その意気や良し！」

ビシリと紫苑は仁王立ちに、右の人差し指を天へと指し示す！

「いざ、女性下着売り場に！」

「お、おー……」

テンション高い紫苑を前に、力なく右拳を振り上げるしかなかった。

ああ、とつても売られていく仔牛の気分……

紫苑は狩人の視線で、色とりどりの多くの下着を鋭く睨みつける。

これだけの下着の量があると、恋愛ヘルマシンの紫苑とも言えどもすぐに選ぶのは困難らしい。

一方、俺は他の女性客の視線が物凄く痛い。つーか、いたたまれない。

この女性下着売り場にある独特の雰囲気、もの凄い重圧感を覚えていた。

そうさながら獰猛な獣がいる檻の中に閉じこめられた気分だよ。

そして、檻の鍵は紫苑が握っている。

とどめに猛獣の名前は綾崎紫苑だ。

「むづ……陸はどれが好きだ？」

「うえ！？」

思わず呻き声を上げる。勘弁してくれッ。これある意味犯罪じゃないですか！？

まったくもって人が死ねるくらいの衝撃ですよ？

涼しいくらいクーラーがかかっている店の中で、脂汗が額に噴き出すのを感じる。

紫苑は手近にあったピンクの可愛らしきフリル付きパンティと、アダルト満点な黒いランジェリーに、清纯なくせして過激な露出の白の紐パンを掴み、眼前に掲げる。

さながら水戸黄門の印籠の如し勢いで。

「う……あ……」

拳銃でも突きつけられたかのように硬直して動けない。

紫苑の持つ下着から視線を床に逸らすと、適当な方向に右の人差し指を向ける。

「あ、あれがいいんじゃないか？」

当面の危機を逃れるための露骨な話題そらし。それくらいしか俺の打つ手はなかったんだッ。

すると、

「……ほう！」

何か感嘆する紫苑の声に、慌てて自分で指差した方向を見て凍り

つく。

そこには、今年の夏の新作の下着が売り出されていた。
目に飛び込んでくるのは《破滅》の二文字。

《これで彼氏のハートをまるごとゲット。セクシーランジェリー最新作！　これで彼もイチ　コロよ》

そのランジェリーの形体はずばりハート。

指の第二関節程度の幅のハート型ランジェリー。申し訳程度に胸を覆い、胸谷間、下乳、腹部を大胆に露わにしている。股間の切れ込みは急角度すぎ、おそらく背中はもちろん尻なんかはほとんど丸出しなのではないだろうか？

色はプラチナに水色がかかった光沢のある生地で、ガーダーベルトも同じような生地できているみたいだ。

これを纏った紫苑を想像する。

(や、ヤバイ……ッ！)

鬼に金棒、虎に翼、弁慶に薙刀、そして紫苑にセクシーランジェリーだ！

セクシーランジェリーという神器を身に纏った紫苑は、まさに一騎当千の古強者になるに違いない！

危険だッ！　俺はもっとも渡してはいけない相手に、危険物を渡してしまった！

触れてはいけない運命のスイッチを押してしまった俺は、ただ破壊へと加速。狂加速！

壊れた機械のようにギギギと不協和音を立てながら首を紫苑に向ける。時間が停滞したような感覚が襲い、視界がブラックアウトしたかのように　歪む。

グニ~~~~~！！

そして、紫苑の表情を見た瞬間、絶望で目の前が黒く明滅する。紫苑の体躯から空間を歪ますオーラが噴出している。

紫苑は本気になった獣の瞳をしていた！ デンジャラスピンクなエナジーが紫苑の体からプロミネンスのように立ち昇る。

「陸……その言葉の中に漢を見たぞ！」

止めようと伸ばした手は、あぁっ！？ しかし掴めない！

ジェットの加速で紫苑は店員から下着をもぎ取ると、試着室へと突撃する。

丁寧に磨き上げられた白いフロアに膝をつく。圧倒的な挫折感が体に押し掛かるのを感じた。

重い……重すぎるよ……なけなしの月給を、飲んだくれのダメな夫にもっていかれる嫁の気分だ。生きる希望と明日への活力がどこも見あたらないよ！

「陸……来てくれぬか？」

抗えない紫苑の声に、生気のない微笑みを唇に刻む。

フラフラと紫苑のいる試着室に近づく俺は、屠殺場に引っ張られていく豚だ。

「し、紫苑……あのさ……」

しかし俺の言葉が終わらぬうちに、勢いよく開く試着室のカーテン。

堂々と、ハート型セクシーランジェリー姿で仁王立ちの、紫苑！ 色気など微塵も感じさせないポーズ。けれど、瞳に焼きつくのは、年のわりにムチムチといいますが、正直これはR15どころか18禁だろと思わず突っ込みたくなるような……

「は、はぶん……」

情けないことに鼻血を溢れさせ、ゆっくりと意識が遠ざかるのを感じた……

薄れゆく意識の中、最後に思ったことは、下着の宣伝文句は見事に的中だなということだった。

第七章 へときめき 恋愛度《を獲得せよ！

綾崎紫苑《

》

（どんぶらこ、どんぶらこ……という感じかな？）

電車の心地良い揺れに身を委ねながらそんなことを思う。

人は列車のようだと思う。

列車（人）の車窓（視線）からの景色が、一定のスピードで過ぎ去って行く。

それはまるで……人間の人生のように錯覚してしまう。

敷かれたレール（生き方）の到達点に向かって、列車（人）は走って行く。

いや半ば強制的に走らされるているのだ。それは生きていく上で仕方がないことなのかもしれない。

そして、私のレール（生き方）は普通の人よりも厳しく敷かれていた。

だが、そんなことは許容できない。

私の人生は私の 私だけのものだ。

私は好きな所で停車みちくさしたり、時には途中下車したり……フッフ……逆走するのもいいな。

そんなことをしながら、自由に 自分の思い描いた到達点

へと行きたいのだ。

(それが漢と言うものだ。……私は女だがな)

まあなんにせよ……

(これからが始まりということか！)

またもや私を抱きしめ口付けをしつつ、熱烈な言葉で私を口説く陸の妄想をしながら、ラヴ必勝の決意を新たに心に刻み込めた。もう微塵切りにするくらいに。

電車から降りると、駅のホームに漂っていた熱風の歓迎をその身に受ける。身体に叩きつけられる暑さとなんと表現していいかわからないが、この独特の匂い。ああ日本に帰ってきたのだなと思えた。日本も十分に都会なのだが、住んでいるのが日本人だけのせいかどうか柔らかない雰囲気があるように思う。

アメリカは多民族国家の国だ。雑多な雰囲気と雄雄しいまでの世界の広がりを感じられる。

日本はどこか優しい佇まいを感じる。

(やはり日本は良いな)

帰ってきて、やはり自分は日本人なのだと改めて思う。

そして何よりもここには陸がいる。

私にとってはそれが何よりも重要で大切なのだ。

どれくらい大切かと言えば、私が教師ならばテストに絶対出すくらいだ。要チエックと関西弁で叫びながら、無意味にボールペンのノックをプッシュしまくるくらい重要なのだ。

実は……私こと紫苑ちゃんも半ば家出をしてきたのだ。

理由は祖父であるお爺様に、かなり強引な形でとある男性と婚約させられたからだ。

婚約者の名前はアレックス・バグネットという。

世界でも五本の指に数えられるくらいの資産家の息子だ。こやつと婚約し、結婚するとなると我が綾崎グループの事業は大きな躍進を意味することとなる。

だが、はつきり言って私はアレックスのことは全く興味がない。

アウトオブ眼中だ。

どうでもいい感じた。

そう　　まるではずれのアイスの棒くらいどうでもいい。

そんなどうでもいい相手に私は自らの処女を捧げる気は毛頭ないッ！

私が好きな相手にこそ、私は自らを捧げたい。それは陸において他にいないのだ。

だからこそ　　右拳を握り締める。

(既成事実を手に入れる！)

そう……織田信長が今川義元の大軍を前にした時、乾坤一擲の奇襲攻撃をしたように紫苑ちゃんは陸との間に既成事実を手にするのだ！

出来れば、今、流行りの出来ちゃった婚なんて望ましい！

私は攻める女だ。今時、待っているだけの女など意味などなし！

乙女として存在価値なし！

押して押して押して押し倒す！　それこそ我が恋愛道！　倒す、

脱がす、頂くだ！

お爺様に産まれてきた初孫を、水戸黄門の印籠のように見せてやればこの戦は貰ったも同然なのだ。

入念な準備をしてきたといえ、残された時間は少ない。

そう……何としても私は陸に告白されねばならない！

この夏に私は全力を尽くすのみだ！

私は横目で陸を見やる。

問題はどうか陸をゲットするかだ。やはり、ここはこの紫苑ちゃんの色気で骨抜きに陥落するのが手っ取り早いだろうか？　というか今すぐ押し倒したらいいんじゃないだろうか？

(む………何だ？)

《陸・陥落大作戦》を思案中だった私は、陸の差し出された右手を見て、困惑に眉を寄せる。

しかし次の瞬間、紫苑ちゃんの明晰な頭脳は解答を弾き出す。フ

フフ、たまに自身の頭脳の冴えに恐ろしくなる今日この頃でござる。
「ワン！」

自信満々の笑みを浮かべながら、陸の右手の掌の上に自分の掌を重ねるように乗せる。

「お手じゃないッ！」

「ち、違うのか!？」

确实だと思っただけに私の動揺は大きい。なんとという不覚だ。

「全然、違う！」

「むっ……では何だ？」

陸をジツと見つめて尋ねる。

陸はそんなにこつちを見ないでくれよと呟く。そんなこと言われ
たらもつと見つめたくなる。だって紫苑ちゃんは好きな相手の困っ
た顔を見るのがちよつと好きなのだ。しかしなんて、ういやつなん
だろつか。

「そ、その……」

言葉に詰まり、私から視線を逸らしながら続けようとする陸の姿
は本当に何と言うか………ラヴ？

恥らう陸の表情は草原を懸命な仕草で駆ける子ウサギを彷彿とさ
せる。

私の胸に内蔵された乙女回路が、ぎゅんぎゅんと駆け巡る。それ
はもつぎゅんぎゅんと。ピンク色のラヴが心臓をきゅんきゅんと甘
く締め上げる。

これはもう押し倒してもいいのだろうか？ とうか許されるよ
な？

「り、陸がいけぬのだぞう？ そ、そんな表情で、はあはあッ、私
を昂らせよって！」

「な、何か勘違いしてないか!? や、やめろよ紫苑! 何だよ、
その危ないピンク色に染まりきっているおかしな笑みは!? やめ
ろ! 手をわきわきと蠢かして、下から火傷しそうな視線で俺を見
ないでくれッ！」

陸はうるたえる。だが、それは私の熱を高めるだけの行為だ。
ああ。襲いかかりたいなあ。

人目のない場所に引きずり込んでちよめちよめしたいでござるなあ。服を縦横無尽に引き裂き、体をまさぐりたいなあ。甘い悲鳴で鳴かせてみたいなあ。

私は溢れてきたよだれを手の甲で拭う。というか、もう辛抱堪らぬ！

「そうじゃないって！ 違うんだって！」
「む？」

今まさに雄々しく大地を蹴り、襲いかからんとしていた私は、きつい陸の叫びに制止を余儀なくされる。チツ、私としたことが襲いかかるタイミングを逃してしまった。

「ようするにだ！ アメリカの長旅や、その……時差ボケとかで疲れているだろ？」

こつちまで恥ずかしくなるくらい顔を赤らめて陸がそう尋ねてくる。

フフフ……相変わらずウブな男だ。そんなお主に私は胸キュンなんだぞ？

「だからバック持ってやるよ」

そう言って陸が、私の肩からバックを取り自分の肩へと担ごうと手を伸ばす。

それを見てボケることにする。人生メリハリが大切だからな。バックに触れるや否や私は叫ぶ。

「む、強盗！」

このボケに陸は一瞬棒立ちになる。

「なんでやねん!？」

それは……まあつつこむのも最もだと思うが。こればかりはやめられない。むふ。

「ここは普通、ありがとうって感じになるシーンだろ!? なんて強盗なんだ!？」

本当は《ときめき 恋愛度》が三ポイントアップしてたりするが、それは陸には内緒だ。

しかし、このまま陸にゴネられるのも面倒なので、話題を変えることにする。

「しかし、吸い込まれそうな青空だな……」

陸のつつこみを軽くスルーして、蒼穹鮮やかな空を見上げ、サングラスの僅かな隙間から飛び込んできた日差し of 眩しさに目を細める。

「え!? まさかのスルー? ま、まあ……そうかな……」

なおもつつこもつとしていた陸は、突然の話題の変化に困惑しながらも答えを返す。

答えを返した陸は、私と同じように空を見上げる。

爽快で鮮烈なこの空気。この夏だけの大気の海が頭上に広がっている。

空は青く、高く、澄んでいる。そして大きかった。青いパノラマは何処までも飛んで行けそうな高揚感を私の胸に爽快と共に運んできてくれる。

「俺、夏は暑くて嫌いだけど……この青い空だけは好きだな」

「ああ。確かにそうだな」

陸の言葉にさも共感を覚えたように頷いてやり、一言とどめをさす。

「地球の終わりを感じさす青さだな」

「ああ、そうだ……って、何でだあああああッ!？」

陸は大きくつつこむと、急に虚しさを覚えたのか、自分の額を押

さえてため息を吐く。

「全くやれやれだな……」

その台詞を私は何となく真似てみる。深い意味はない。

「うむ。やれやれだな。全く先が思いやられる」

私の台詞に陸は口元を引きつらせる。いい感じに暖まってきた。
っ。

「だ、誰のせいだと……お、思っているのかなあ？」

所々言葉を破綻させながら、妙に優しい声で陸が尋ねてくる。

(ニヤリ)

心の中でほくそえむ。

「おのれええええええ、あやつめえええええ！」

サングラスを取ると、右の拳を握り締めて、仇敵にしてやられたかの如く悔しそうな表情を見せる。

演技はバツチリだ！

「あやつって誰だよ！？ 紫苑のことだろおーッ！」

陸がすかさずつつこんでくる。私は不意にドキリとした。

何か本当に胸がいつぱいになって苦しくなる。

陸が私の名前を大きな声で呼んだ……ただそれだけのことだが、私はこんなにも嬉しくて、だが同時に気恥ずかしいような捉えどころのない想いが溢れて頬を赤く染めた。

「ったく、何だか紫苑のペースに振り回されまくりだよ……」

不意に突風が吹いて目を細める。

そして、細めた目に映る光景。それは

強烈な夏の日差しを背中に、陸は微笑を漏らしていた。

だが、それは不快な感情を表しているわけでない。

懐かしげな……再会の、おかえりの笑顔だ。

ふわりと陸の手が私の頭におかれる。

「でも……凄く紫苑が帰ってきた気がするよ」

そうふんわりと柔らかく微笑んで、私の頭を優しく撫でてくれたのだ。

全身の血がカーッと頭に上がるのがわかった。心臓がどくどくと脈打つ。

触れられた頭が……髪が甘く痺れて、胸が苦しい。その笑顔は反則すぎるじゃないか！ というか顔が近いッ、近すぎるッ！

(な、なんだなんだなんだ！ この馬鹿ものがッ！)

陸は私のバツクを担ぎ直して改札口へと歩き始める。その後姿は、私を惹きつけてやまない。

さっきまで撫でてもらった髪に手を触れ、陸に聞こえないように私は呟く。

「なにが私のペースに振り回されまくりだ……おぬしなど笑顔一つで私を振り回しているじゃないか……」

「紫苑？」

陸が振り返る。

小走りで陸の左側へと移動すると、陸の横顔を見ながら一緒に歩き始める。

きつと、こついつさりげない時間が至福なのだと思いつながら……

ああ……熱い夏が始まる。

日本よ、私は帰ってきたぞおおおおッ！

第八章 頼むから俺の話を聞いてください……

《天堂陸》

《

天堂家

「ぷはっ!」

男らしさ爆裂と言えるくらい粋な仕草で、紫苑は俺が出した麦茶を飲み干す。

「陸、もう一杯欲しいでござる〜」

「何だよ、ござるって?」

帰国後、何度が聞いたその語尾。

ちようどいい機会なので聞いてみることにする。

「魂の発露だ」

顎に手を添えて意味なく紫苑は笑う。

その仕草に笑みが零れてしまう。

待たせるのもなんなので、すぐに紫苑に麦茶をいれてやることにする。

麦茶をいれてやろうとコップを持ったところで紫苑に話しかけられた。

「陸、頼みがある」

真剣な表情でそう切りだしてくる。

「ん？」

「執事っぼく淹れてくれないか？ あ、なんならメイドさんっぼくでも……」

「執事さんっぼくね、了解！」

危うい要求をみなまで言わせず封じる。危ないところだ。というか紫苑の右手がバッグに延びており、見間違いじゃないとしたら……なぜかメイド服っぼい切れ端が見えたのは気のせいにしておきたい。

「ん……」

とはいえ、どのように執事っぼくするかと悩んでいたら、紫苑が立ち上がる。

視線を向けると、任せろとでもいうように大きく頷く紫苑。

(不安だ……)

そしてそれは

「じょおおおっ！」

両眼を光らせてどこぞの宇宙刑事のような雄叫びを上げ、椅子から飛び立つ紫苑のその姿は、荒鷲の如し。

どこから取り出したのか。その右手には執事服。

「いくぞ萌殺めいころ」

執事服が空を舞う。

「ぬううりゃあああああああッ！」

「うわっ!?!」

目にもとまらぬほどの勢いで紫苑の両腕が動く。それはさながら千手観音のようで、背中からいくつもの腕があるように錯覚するほどの凄まじさ。

「見るがいい！ これぞ紫苑ちゃん七つの大技の一つ《乙女ラヴコンセプション》！」

不安は的中する。

気がつけば、俺は一分の隙もなく執事服を身に纏っていた。
黒を基調とした執事服。

燕尾服の後ろは堅い生地で型崩れがなくピンと整っていて否応なしに背筋が正される。シルクの黒ネクタイ。清潔な白いシャツ。黒いラインの入ったズボンと黒艶が眩しい革靴にまっ白い手袋。

まさにバトラーと呼ぶに相応しい装いだ。

ボケもここまで徹底されたら、大阪生まれの大阪人としてはノルしかない。

「どうぞ、紫苑お嬢様」

バトラー姿で透明なグラスに麦茶を淹れる。はたから見たら遊んでいるしか見えないような失笑もののシーンなのではないだろうか？
「むふ、ごっつあんです」

しかし、紫苑はどこまでもマイペースである。

お嬢様とはほど遠い素敵なワードをのたまう。というか勝った力士がご祝儀受け取るみたいな感じた。

(ほんーと、外見と中身とのギャップが激しいやつだよな……)

けど、それが紫苑の魅力なんだろう。

「陸、そう言えば……ご家族の方はどうしたんだ？ 誰もいないよ
うだが……」

考えにふけっていると、紫苑が話しかけてきた。

「ん？ ああ、母さんは買い物で、海は本屋に行ってる」

出かける前に見た伝言板の内容を思い出して答える。

「まあ、そのうち帰ってくると」

そう言いかけた直後、

「ただいま」

ほのぼのとした少し間延びした声が玄関のほうから聞こえてきた。とても二児の母親とは思えない若々しい声だ。やがて外見も二十歳半ばくらいの持ち主がリビングに姿を表す。

若づくりというか、極端に童顔なのだ。思えば、俺の容姿は母さんの血を強くひいているように思う。

「目の前の童顔女性が、俺の母さんで、名前を天堂てんどう 空音そらねと言つ。

「ただいまの反対はこんばんはー」

さらに母さんに続いてこっちのわけのわからないのが、俺の双子の弟である天堂てんどう 海うみだ。

「おかえり」

帰ってきた母さんと海へと声をかけ、ついではばかりに麦茶を淹れてやる。

「うむ。では、《陸・陥落大作戦》を実行するか……」

紫苑は小声で何か不吉なことを呟くとすくつと立ち上がり、リビングの床に正座する。

え〜と、紫苑さん何を……？

当然の如く母さんは「あらあら」と頬に手をあてて困ったような顔で紫苑を注目しているし、海は

「陸その格好何？ 執事？ バトラー？」

「……」

海の質問を笑顔で取りあえずスルーする。

「陸は普段は真面目だけど、なんか急にボケるよなー。しかもそれギヤップ凄すぎていつもスベるからなー。同じ顔してるんだから俺の迷惑も考えてね？」

いやいや、それ海に言われたくない。

いつも奇行に走るのは海のほうだ。

なまじ顔がそっくりなのであんまり奇行に走らないで欲しい……

その願いは今まで生きてきて一度も届いたことがない。

だが、今は兄弟間の瑣末なことにこだわっている場合じゃない。

(……何をやる気だ?)

小さな戦慄が背中に流れる。流れるどころか走り始めてる。それはもうウサイン・ボルトくらいのフライング気味ですよ!?

「お久しぶりです、ママ上殿」

「あら。え〜とどちら様？」

母さんの間延びした声が誰何するや否や!

紫苑の瞳がカツと効果音の聞こえてきそうな勢いで見開き、正座の姿勢から床に頭を下げるという　ジャンピング土下座！
そしてとんでもない内容を叫ぶ！

「お義母さん、陸を下さい！」

「ぐはあああああああッ！？」

内容の凄まじさに思わず、執事服のまま床にずっこける。な、なな何を言い出すんだ紫苑は！？

「ひゅー、爆弾発言ってゆうやつか。やるな陸」

海のやつがなにやらほざいていやがるがこの際無視だ。

なによりも先に紫苑の暴走を止めないと！

「あらあら。まあまあ。陸の恋人の方ですか？　こちらこそ陸をよろしく願います」

へへーっと母さんも紫苑に倣うように土下座して挨拶を返す。

やばい、ボケが二人に増えた！？

「ちょよ、ちょよと待てッ！」

何の疑いも無く信じる母さんの素直すぎる性格に、本気で焦りを覚えて口を開く。

「うっ！？」

いつの間にか後ろに回った紫苑に、背中越しに複雑な関節技で固められ、あまつさえ紫苑は右手の掌で俺の口を塞ごうとしてくるッ！？

（こいつ！　俺の発言権を奪う気だ！）

その執拗さは日本の常任理事入りを拒む中国の如く。

大蛇の如く悪意を持って動く手のひらを必死にかわしつつ打開策を練る。

「いえいえ、こちらこそ。《初孫》を楽しみにして下さい」

「何をいつてるんだあああーッ！？　ふ、不潔だぞ！」

絶叫してしまう。

一部をあまりにも強調した倫理規定を外れる発言に俺は泣きそうになる。というか泣いていい？

「陸、やるな。もつと陸はウブかと思つたよ。俺も見習わないとな」

爽やかなスポーツマンのような笑顔を浮かべて右手の親指を立てて笑う海。

「ちよつと無駄に歯を白く光らせてないでフォローしてくれ!？」

「ば、馬鹿! 母さんこれは違うよ!？」

「初孫楽しみね」

「ちよつと母さんツ!？ なに夢見る瞳で斜め上四十五度を見上げてるのさ!？ もつと現実をちゃんと見ようよ、俺らの年齢はきつと年金貰えないんだよ？ 貢ぐだけ貢いでホストに捨てられる田舎から上京してきた娘さんの如しだよ!？」

「子供は四人。男が二人に女が二人。程よい大きさの白い家に住み、白くて大きな犬を飼うことにしよう! 犬の名前は武蔵丸だ! 彼には小次郎というライバルがだなあ……」

「紫苑も妄想度一〇〇%の野望を、俺の耳元であたかも洗脳するが如く呟かないツ! しかも何その犬のライバル設定!？ 無駄に細かいんですけど!？」

俺の叫びは虚しくリビングに響き渡る。ちよつと誰か話を聞いてよ!？ 俺はここにいろよ!？」

「俺も彼女見つけて、高校ライフを満喫しよ」

「お、俺の……ッ」

俺は今、張り裂けんばかりの風船だ。

「陸ちゃん、新婚生活を楽しまたいのはわかるけどいきなり別居しないで、暫くお母さんたちと一緒に暮らしましょうね」

「俺の話を……」

ある感情をとき放ちたくてしかたがない。

「結婚旅行は熱海がいいな! ちなみに浮気は許さないぞ? もし浮気したら紫苑ちゃんヤンデレ開 眼だぞ? それから、老後は私が老人ボケになっても見捨てずつっこみを返してくれよ?」

俺はにっこりと青筋つきの顔面神経症のような笑みを三人にプレ

すが……」

瞬間、俺の背中に電流走る。

な、何だろう勝負つて？ 湧き上がる不安に苛まされる。

「余裕よ」

俺の疑問が置き去りに、母さんは親指を立てて紫苑に笑いかける。

「大感謝ッ！」

紫苑はガシツと母さんに抱きつく。

何やらかなり二人は打ち解けた様子だ。

叫びすぎたせいか喉の渴きを覚え、冷蔵庫に向かい麦茶をコップに注ぐ。

「でもね、客間がちょっと散らかってるのよね」

視線を紫苑たちの方に向けながら、何の気なしにコップの麦茶を飲もうと傾ける。

次の瞬間！

少女チックに首を傾けながら、母さんが爆弾宣言を放つ！

「だから、今日は陸の部屋で一緒に寝てくれない？」

「是非ともツツツ！」

「ゲハアアツ！？」

紫苑の返事は音速を越えていた。

「げほげほッ！」

飲んでいた麦茶を喉に詰まらせ、気管の変なところにはいったせいで咳き込む。

海がさすさす背中をさすってくれた。

一切の間を置かず、紫苑は両手の親指を立てて即答してしまい即決。

ま、本気なの！？ これ悪い夢じゃないの！？

しかも紫苑の瞳は獲物狙う鷹のように。

もしくは夜這いを決心し野望に燃える青年のように、熱を 帯

びていた。

というか紫苑の目が語っていた。

『いただきますッ！』と。

(や、ヤバイ!?)

聞こえてきた幻聴に悲しく鼓膜が震え、背骨が悲鳴を上げる。

予感を超えて、確信のレベルまで上がった危機に身を震わせるしかなかった。執事服で。

第九章 アレックス・バグネット

ス・バグネット》

《アレック

バグネット邸宅

ボクの名前はアレックス・バグネット。

世界的に有名な複合大企業にてバグネット財閥の長男にして後継者であり、美貌と知性を兼ね備えた究極生命体だ。

（ああっ……ボクは美しい！）

絨毯の上でスピンを舞う。そう、美しい白鳥キグナスのように。

星々も割れんばかりの拍手でボクを称えてくれるだろう。それアンコールアンコール！

（ああ、ボクは完璧だ！）

ボクのハートはウキウキのしゃかりき。

このハートの熱さは意識しなくても高まり、狂ったようにボクはタップを踏み鳴らす。

それは某国の農民のケチャと言う踊りを思わず激しさだ。オウ、イエエーッ、ケチャ！ モンキーダンスッ！

（ああ、ボクは素晴らしい！）

パーフェクトなボクには、愛しい婚約者がいる。

名前はシオン・アヤサキ。

その美しさは女神だ。天使だ。小悪魔的プリティーだ。抑えきれない下半身の衝動に狂いそうだ！

下半身が好きだと自己主張、もう止められないッ！

「ハッハッン！」

胸元から取り出したクシで優雅な金髪のマイヘアをアグレッシブかつ繊細に整える。

神が奏でる奇跡は、やがてボクの髪に降りるだろう。

カリスマ美容師などボクの前では一セントの値打ちもない。

そうゴッド美容師のボクの目の前では、な！

（ああっ、ボクは何て素敵なんだ！）

純白のスーツを身に纏い、情熱の紅のネクタイを締めて、バラを口にすれば……………ほら完璧。

ボクは美の集結体となる！

輝かしいオーラに、全てを兼ね備え、美男子で、紳士で、資産家で、高貴で、万能で、マーベラスかつエクセレントでエリートなこのボクにもなかなか手に入らない存在が、たった一つだけある。

それが、シオンだ。

「わかつてるさ子猫ちゃん。照れて、そしてボクの素晴らしさに、ためらいを覚えてるんだね？ 心配しないでいいよ。ベッドでは優

しく闘争行為がボクのモットーだからね。愛の聖騎士と呼ばれたこのボクが、燃え上がるラヴでメロメロさ、ウヒ」

愛しい婚約者に熱いラヴを加速させる。

マシンガンの如くラヴの弾丸をキミに全弾命中させてあげる所存さ。

そしてゆくゆくはキミをボクの愛の奴隷にしてあげる

「おっと、そういえばシオンから手紙がきていたな」

ボクは机の上に置いた手紙を開けてみる。

きつと溢れんばかりのラヴが詰まっているに違いない。

まったくもうプリーティーなのだから！ 切ない想いでボクが欲し

くて、体が夜鳴きしているに違いない。全く、ビバ十八禁行為だ。

ウホ！

「えーと、何々……」

『婚約破棄内容』

どこぞの資産家アレックス・バグネット。

単刀直入に言うが、婚約破棄だ。そもそもアレ公、私はあまりお前が好きでない。

婚約も私のお爺様とお前の父上が決めた問題だ。そんな婚約承諾することはできん。

もう一度言う。婚約破棄だ。

私は日本に住む天堂陸と言う幼馴染のことが好きなのだ。

故に、お主とは婚約はおろか結婚などしたくはないと言うことだ。

まあ、そんなわけだからさらばだ！

「エドワード！」

我がバグネット家に代々仕えてくれるこの道四十年のベテランの執事を呼び出す。

「はい、坊ちやま」

「このジャップのリクと言うこのワールドで最も劣ったイエローモンキーのことを調べてくれ！ あと写真も欲しい！」

「すでに用意しております」

優秀なエドワードはすでにリクとやらの写真を用意しており、ボクに手渡ししてくる。

書類には、ボクから愛しい恋人を奪った憎々しい少年の写真がある。

こいつがリク・テンドウ！

「ふう〜む……」

庶民にしては美男かもしれないが、男らしさの見えない顔つきだ。パツと見て女の子と間違うような女々しいベビーフェイス。

所詮このボクの美貌と比べれば、王と奴隷。天と地。ダイヤモンドと石程の差がある。

「オウ、シイイット！ イエロージャアアップツ！」

書類を空中に投げ出すと、ボクは胸元の拳銃を抜き様、絨毯に落ちる前に書類の写真へと乱射する。

ズキューン、ズキューン、ズキューン！

主のボクに代わって鋼の怒号を上げ、突き刺さる弾丸が写真のリクを撃ち抜く！

穴だらけになって足元に落ちてきた写真をさらに踏みつけ、踏みにじり、踏み潰してやる！ フハハハツハ！ こうだ！ こうしてこうやってこうしてくれるわッ！

「オウ、サノバビッチツ、ファッキン、メン！」

一体、この男はななな、な何のつもりだ！？ たかが庶民の分際

で、このボクの婚約者に手を出すとは……！

神をも恐れぬ大胆不敵で厚顔無恥！ ハレンチ満開、サムライ、フジヤマ、スシ、ゲイシャ！

「おのれええええええッ！ しょ、庶民の分際でっ、このリッチ・プリンス・アレックス様に盾突くとは！」

おそらくリクは言葉巧みにシオンをそそのかしたに違いない！

いやもしかするとシオンはリクにエツチな弱みを握られていて無理矢理従わされているに違いない！

なんて狡猾で陰湿でうらやましいやつなんだ！ ある意味尊敬する！

しかし、さすがボク！ 灰色の脳細胞は今日も冴えまくっていて、最高にいハイってやつだ！

乱れた髪を胸元から取り出したクシで丁寧に整える。

紳士たるもの常に身だしなみには注意を払わなければならない。

そもそもボクとシオンとの出会いは運命的なものだった。思えばボクたちの幸せはあそこから始まったのだ……。

とあるパーティー会場で、ボクはシオンと出逢った。

我がアメリカの白人女性に無い繊細で可憐な容姿は、一目でボクを釘付けにしてイチコロにした。

そう……さながらゴキブリホイホイのゴキブリのように……。

ダイヤモンドにも負けない輝きを放つ神秘的な黒瞳に見つめられた瞬間、ボクの背筋にビリビリと1・2ジゴワットの電流が走った。一目で確信したね、これは神がボクに遣わしてくださった女神だと。

美しさを塗り込めた鼻筋のラインに、少女の清楚さと女性のセクシーさを兼ね備えた形の良い唇……毎日毎晩あの唇が夢に出る。ああ……っ。

ボクにあの唇を独り占めさせてくれないだろうか？

そして明るいオレンジのカラーの、それこそ無意識に手を伸ばしてしまふサラサラのショートカットの髪は同じ量の黄金の価値がある。いや、それ以上だ！

さらに、目を奪うような深紅のドレスに身を包んだシオンは、十六歳とは思えない均整のとれたモデル並のスタイルをしていた。ムラムラバディにハラシヨールロシアだ！

あの胸を鷲掴みたい！ 収穫祭だ！ サンバのリズムでドンドコドン！

まさにボクの生涯の伴侶とするのに相応しい女性だ！ 夜のパートナーだ！

そう！ 彼女には美しいボクこそが相応しいッ！

決っして

「あのどうしようもない程の庶民で下賤の生まれの極貧家庭で、ろくな情操教育を受けておらず、無教養の非常識な最下級の者にはシオンは全く似合わない！」

そう！！ この高貴で気高いボクこそが、シオンを幸福絶頂に導けるのであり、間違ってもあの少年ではない。

絶対、ない。断じて、ない！ マジありえない！

そう！！！！ この神が設計し、神すらをも越えてしまった無敵完璧超人アレックスの前に立ち塞がっていいものは何人たりとも存在しない。

いや、してはいけないのだ！

「きた！ きたあっ、きたきたきたあああああッ！」

ボクのインスピレーションが囁く。

すばらしいイックがボクの口から奏でる寸前のこの昂奮が全身に駆け巡る！

「カッコイイ ああ超絶美形が 滴り落ちる。五・七・五」

ボクは全季節いつでも美しいから、それが即ち季節！

「さすがでございます、坊ちやま」

「ふふふ、よせエドワード。照れるじゃないか」

よおーしみなぎってきた！

こうしてはられない！ 彼女にとって誰が相応しいか……リクに教えてやらねばならないだろう！

「エドワード！」

近くに控えていたエドワードに鋭い視線を向ける。

「はい、坊ちやま」

ずいと一歩エドワードは前に出て、慇懃な態度で一礼する。

「エドワード、ボクはシオンに会いにすぐさま日本に行く。出国の準備と自家用のジェット機の用意を頼む」

「かしこまりました」

エドワードはもう一度慇懃に礼をして、静かに退室する。

広い部屋にはボクがただ独り……

「待っていておくれ……愛しのスイート・エンジェル・シオン！
ボクの花嫁。すぐに超カツコイイボクが迎えに行くからね……」

夜に輝く月を見上げながら呟いた。

第十章 乙女ザムライ ラヴ駆け引き！

堂家 陸の部屋

天

《天堂陸》

切迫感に襲われながらも、何気無さを装いながらクーラーのタイマーのセットをする俺こと天堂陸は危機に瀕していた。

どのような危機かというと、母さんの提案で紫苑が俺の部屋で一緒に寝ることになってしまったというものだ。

しかも紫苑はパジャマを持っていないというので、下着の上に俺のYシャツを着ているだけという色っぽい格好。

健全な高校生ならば、小躍りしそうな状況だ。

けれど、女性とのこういうった状況に慣れていない俺にとっては、負担のかかる切迫感に悩まされるだけだ。

(……………いや、それは嘘かな)

少して否定する。

俺だって男だ。やはりこういうった状況に嬉しさを感じることは否

めない事実だ。

それも　　もう会えないと思っていた初恋の相手で、大がつかほどの金持ちのお嬢様。

そのお嬢様は、顔良し、スタイル良し、家柄良し。

性格は……………多少変わっているが良し。

そんなお嬢様とこんなにも近くにいるのだから、俺はかなり幸せ者なのかもしれない。

（なんだか二人っきりの雰囲気酔ってしまいそうだし……）
そう思う。

紫苑の下着　　空港で買った勝負下着　　コードネーム・ハ

ートラヴ（紫苑命名）の上はYシャツだけという色っぽすぎる格好。この二人つきりだという状況。そして、このなんともいえない雰囲気。

興奮で身体がふわふわして落ち着かない。

ところが、その時、

「海いいいを　　こうえええあああ、サムライがあああ」

宿敵いいと出会って、ござる・ござる・ござるう」

床に布団を敷きながら紫苑が歌い出したのだから、色々な意味で堪らない。

この二人っきりのドキドキした状況を、甘い雰囲気、何と云うか……一瞬で壊滅的な状態にした。

デンプシーロールを全段直撃した後の腰砕けのボクサーとでも言った方が判りやすいかもしれない。もう正直、立てる気がしない。

いやこの場合、マタタビに引き寄せられて捕まり、保健所に強制収容させられたネコの気分の方が正しいと言えるだろう。正直、希望を抱くことができない。

とにかく、俺は思った。

顔に縦線を引きながら思った。

公衆トイレに入って用を足した後、紙がない事に気が付いたような表情で思った。

(色気が無いっ！！！)

あげく！

「ぐさっ！ バシユツ！ ドバドバ、グシャア！ …… フッフ、拙者の刀は血に飢えているでござる」

(殺伐しすぎて、ロマンスも無いっ！)

そつだよな……ッ。

紫苑があらゆる意味で普通と違うなんて判りきった事だったよな！？ なに期待していたんだろう、俺……orz

「……紫苑、寝る準備できたか？」

ため息混じりに、少し虚ろな視線を紫苑に向ける。

すると紫苑は俺と違い、打って変って明るい口調で返事をする。

「うむ！ 準備万端！ 一〇年は寝られそつだぞ」

「……それは単純に寝すぎだろ」

軽くつつこむと、部屋の電気を消す。

途端に暗闇と静寂がひっそりと輪郭をもって部屋に訪れた。外の夜の気配が、部屋の中にと忍び寄ってきたかのようだった。

しばしの沈黙が部屋に横たわる。

緩慢な睡眠の欲求が、クーラーが送り出す風のように密やかに押し寄せてくる……今日は色々あってなんだか疲れたな……

「陸……」

「……ん？」

ある意味油断していた事もあった。

そんな台詞が、もう紫苑の口から出ることが無いと決めつけていたせいもあった。

だから次の台詞を聞いた時、俺は焦った。

「二人つきりだな」

「……ッッ！？」

いきなり心臓の体温が融点を超え、沸点に送り込まれた気分だった。

「な、な、な、ななな何、いいい言ってるんだよ!？」

声は悲しいくらいに動揺していた。

と、暗闇の中……紫苑が布団から体を起こして、俺の方に顔を向ける。

暗闇と言っても、外からの月明かりがあるので、完全な闇と言っただけではない。

だから、紫苑の表情がうつすらと見えていた。

月明かりの下で、紫苑は真剣な表情で俺を見ていた。

それを認識した俺は……！

顔が火照り、喉の渴きを感じる。唾を飲み込むゴクリという音がひどく大きく聞こえたような気がした。聴覚が異常なくらいに鋭くなっている。

「今夜は……寝かさぬぞ……」

ゆらりと立ち上がった紫苑が、俺の寝ているベッドへとゆっくりと近づいてくるッ！

彼氏に迫られる女の子の気持だが、今、非常に良く判ったような気がした。

（何と言うか……おいしいけど、怖いな！？ うんッ！）

などと思っている間に、紫苑は目の前にいた。

（あ……っ）

と言っ間もなく。

グワツシイッ！

そんな効果音が聞こえてきそうな勢いで、紫苑に両肩を捕まれる。

あ、あのちよつと痛いんです、けど……

瞳に涙みを潜ませた紫苑は、漢字四文字で言うならズバリ、天下無双。

生死を悟りきった瞳で宣告された気がした。

『ぬしはもう……終わりじゃ。観念せい』

（本気スかああああああああッ！？）

そんな、幻覚アンド幻聴を見聞きしている中、気が付けば紫苑は俺と鼻の先が触れ合うような距離にまで接近していた！ い、いけないこのままじゃ色々な何かがぶつかってしまっ！

「今宵は楽しもうぞ…ふ〜ふふ」

「ななな、何を楽しむんだよおーっ!?」

もはや凄みどころか、狂気まで潜ませた紫苑の瞳に、俺は半泣きどころか全泣きして叫ぶ。内心の思いは『頼むから堪忍や』という具合だ。これ一応、R15ですよ!?

と、そこで紫苑は俺の叫びにピッタリと動きを止めると、ちよこんと首を傾げる。

「本当だ……何を楽しむのだろう?」

そのコメントに俺の脳は一瞬動きを止め、その次に脳から送られた指令を実行する。

「なんでやねん！ 分からんのかーっ!?」

お、おおお、お前それは反則やる。ここっ！ここっ！ここまで引っ張っておいて、さ、さささすがのワイもそれは許されへんわー（何とも言えない感情のあまり関西弁）

紫苑に全力でつつこみを入れる。

「む……では陸には分かるのか?」

「ッ!?!」

ニコニコと満面の笑みの紫苑の質問に動きを止めてしまっ。

や、野郎……そうきやがりましたかッ。

ぬかった。これは紫苑の策略!

さながら紫苑ちゃん七つの大技の一つ《乙女ラヴ駆け引き》に違いない!

わざと無邪気にふるまうことにより、相手の本音の感情を引き出そうとする巧みな人心掌握だ!

紫苑、なんて恐ろしい子。どうでもいいけど、紫苑の名前は呪怨に似てるな。

いやいやそれどころじゃない。

そりゃ俺だつて清浄無垢の赤ちゃんとじゃないんだから、分からないわけじゃないけれども、だからって！

(い、言えるわけがないだろーっ！)

心の中で絶叫する。

こつなつたら紫苑を丸め込むしかない！　じゃないと俺の立場がヤバイ！

捕食者にいつでも食べられる草食動物だと思つなよ！？ (涙)

「と、当然分かるに決まっているじゃないか」

「ほほう。では何なのだ？」

「それは、その……なんだ…… (もう手詰まり)」

早いッ！　早いよ、俺。三秒とすら持たなかったよ。

目まぐるしく頭脳を回転させる。ちようど、テスト五分前の最後の足掻きの如く。

あまり適当なことを言うわけにはいかなかった。もしあまりにも軟弱な回答をしようものならば、ピンクに狂った獣が襲いかかってくることは間違いがない！

確信があるね！

だって彼女、ピンクの吐息をコフウーコホウーとダークスペースのように吐いていらっしやるんですもの！

少し考え方が人よりずれているが、紫苑は無能というわけじゃない。

むしろピンクに狂えば、これほど恐ろしい野獣はいない。

手負いのトラより獰猛だ。

ここは本当半分嘘半分でいくしかない。そう、最も巧みな嘘というのは真実が半分入った嘘なのだとかの本で読んだ気がする。

「一緒に寝る……とか？」

「ふむ……なるほど。よかろう！　では……いざッ！」

紫苑が。とんでもなくいい匂いが、柔らかな肢体が布団の中に滑りこんでくる。

(何言つてんだ俺はーッ！?)

心の中でまたしても絶叫する。

なにか俺はわざわざ自分から両手を上げてアホのように叫びながら、崖っぷちに向かって全力疾走している気がする。

先は落ちるしかないとわかつているのに！

そんな俺の心情を置き去りに、紫苑という超絶的な女の子的存在が、俺の横に数センチ先に確かにいる。

(う、うわあああああああッ！？)

背中を向ける。

壁にへばりつく。俺はトカゲイモリスパイダーマン！ 可能であるならば、壁の先へと逃げたい。へたれと呼んでくれていいさ！

ああ呼ぶがいいさ！

神様に祈りたくなってきた。

俺だつて男だ。初恋の相手がこんな近くに寄ってきたら、何も感じないわけがない。

だけど、いつも最後にぶつかる壁がある。

それはやっぱり紫苑を取り巻く状況だ。差別しているわけじゃない。

どちらかと言うと強大な遠慮だ。

だつてそうだろう。たとえるなら、農民の俺は今……一国のお姫様と同じベッドで寝ているもんなんだ。

く、くそ釣り合わない。身分違いにも程がある。

紫苑のことを想えば想うほど。考えれば考えるほどに紫苑と俺との距離を感じる。

痛いくらいに……

恋慕の想いはただ空回りして、紫苑に伝える前に常識や状況に潰される。

好きだつてことすら口にできない。

(やっぱり一緒に寝るなんてだめだよな……)

冷静になってみてそう結論をだす。

「紫苑……やっぱりさ……」

と、そこで気が付く。
あまりにも隣が静かすぎることに。
おかしいぞこれは。紫苑ならば布団に入るや否や俺を組みしいて
もおかしくないのに……
たとえるなら蜘蛛の巣にひっかかった虫のように食われてもおか
しくないのに。
「し、紫……苑……さん？」
恐る恐る後ろにいるであろう紫苑を振り返る。

「スー……スー……」

納得した。

いつのまにか……紫苑は眠っていた。
なんつー寝つきの良さだ……。

「まったく……人の気も知らないでさ……」
苦笑を漏らして、つい出来心で紫苑のほっぺたをつんつん右手の
人差し指で突く。

それが間違いだと言えなくもない。
混ぜるな。危険？
いや、この場合エサをあげないでくださいか。
なぜなら

つんつん、と柔らかい頬を突いた瞬間、俺の指は、

噛みつかれます、から。

そうばかりと。

パクリと紫苑の唇に食いつかれた！？

やわらかい唇の上と下が俺の指を挟み、優しい甘噛み。暖かい口

内の気配

(うひゃあああああああああああッ!?)

背中を海老反りにして悶絶する。

あげくの果てに紫苑の、し、ししし、舌が!!

腕を細心の注意を払いながら引き抜く! ちゅぽんとまるでタコの吸盤のような音を立てて、なんとか指を引き抜くことに、はあはあ、せいせい、せ、成功する。

「うん、むにゃむにゃ……紫苑ちゃんベロチューは得意だぞう……」

(聞いてないから!? そしてその実力はよくわかりましたからッ!)

人が混乱の極みにある中、紫苑はと言えば幸せそうな寝顔を無防備にさらしている。

その寝顔に視線がはずせない自分がいた。

紫苑の吐息に、半開きの唇に、閉じられた瞳に、魅了されずにいられない。

隣で寝る紫苑の髪を、俺の出来るかぎりで優しく撫でる。

紫苑の髪は手に心地良く、凄く感動的なくらいサラサラしていた。

女性の髪に手を触れ

たのはこれが初めてのせいだろうか。

顔が熱くなり、脈拍が速くなるのを止められなかった。

この瞬間をひどく幸福に思う。

繊細な波のような幸福感に包まれ目を閉じる。

先程までの気持ち嘘のように安らぎ、いい夢が見れるような予感がした。

第十一章 朝のラヴ チャンス到来

綾崎紫苑》

》

「む……う……う……朝か？」

鳥殿のさえずりを耳に目覚めた私は、おそらく三国一の幸せ者だ。思わず右手の親指を立てたくなる。いや、むしろ立てる。

と！

瞳を開けると目の前には陸のアップがあつた！

「!？」

私は驚く。

ちなみに陸のアップに驚いているわけではない。いや、それはそれで驚いているのだが、それ以上に驚くべき事実があるのだ。

なんといつの間にか、私がつ、陸にツ、抱き締められていたからだ！

思わぬ幸福的展開に私の頬は弛みそうになる。いや、弛む。

今ほどクラッカーを鳴らしたいと思つたことはない。今日はハン

バーグを食べよう。

「据え膳食わぬは漢の恥でござるな」

このありがたい展開に感謝すべく両手を合わせる。

こちらからも遠慮なく抱き締めさせて貰うことにしよう。

ギユウと抱き締め、顔を陸の胸辺りにグリグリと押し付ける。

「グリ〜ン、グリ〜ン」

陸の身体は私よりも一回りほど大きくて、私の身体はすっぽりと陸の腕の中に収まってしまう。

鼻孔に陸の匂いを感じる。

私はハイエナのように鼻を膨らませた。

(あああああッ、た、たまらん……ッ！)

私はマタタビを手にした猫殿と化した。

恍惚とした溜息を吐き出す。これだけでご飯三杯はいけそうだ。

人間誰しもその人自身の匂いを纏っているものだと思う。

陸の匂いは何と表現したらいいのだろうか……？

ハンバーグの匂いでもないし、猫殿や犬殿の匂いでもない。

ただ一つ言えること。

それは私が一番安心できで、心地良い匂いということだ。

私専用の麻薬のようなものだ。ふふ……胸キュンだな。

(さあーて……)

陸の顔をまじまじと見つめる。整った鼻筋に、ひき締まった口元は……

「いかん、よだれが……じゅるり」

口からこぼれ落ちるよだれを右の甲で拭き取る。

「ん……？ んん……」

慌てて身じろいだせいか、陸が目を覚ます気配を見せる。

「いかん！ まだ夢の中で、どんぶらこしているー！」

陸の頭に手刀をビシリと落とす。

「うー!? 痛ッ……ああ? 朝か……?」

だがどうも逆効果だったらしく、非常に遺憾なのだが……陸は目を覚ましてしまった。

「……………へ?」

陸は自分の腕にいる私を見て思考を止める。

数十秒間、私と陸は至近距離で見詰め合うことになる。

「……………」

「……………!」

(ラヴ チャンス到来ッ!)

明晰な私の頭脳は答えを導き出す!

さすが私だ! 愛しいものとの機会を確実にものにする、それが恋する乙女の必須条件!

これぞ紫苑ちゃん七つの大技の一つ《乙女ラヴチャンス奪取》! 恋する乙女は、機会に敏感なのだ!

機会到来、即奪うように行動! 先手を打つ。それこそが乙女の恋の成就に繋がるのでござる。

陸の唇を奪うべく、顔を前に……前に、前にッ、前にイッ!

「どわくああああああアアアあっ!?!」

陸は奇怪な叫び声を上げて慌てて飛びのき、私の唇の射程から逃れるッ。

おのれ、後一步のところ……。

「な、ななななん………なんで!?!」

陸は震える指先を彷徨わせ、私を指差す。

「いや、陸が抱き締めてきたのだぞ」

「あ………。あああっ!?!」

私の主張に何か気が付いたのか、陸は大声を上げる。

「すまん! 俺、寝てると無意識に側にあるもの抱き締めてしまうんだよ。ほ、ホントにゴメン、悪かった!」

陸は両手を合わせて平謝りに謝ってくる。

(これは良いことを聞いた。……今度から利用させてもらおう)
心の親指をビシッと立てて、会心の笑みを唇の端に刻む。

(さて、ここでさらに陸に貸しを作っておくか……)
まあ、恋する乙女はいつでももしたたか。駆け引きが巧みでないと、
な

「ふん……抱き締めてしまっか……」

口調にさり気なく悪意と毒を込めて、陸を半眼でチラリと見やる。
ちなみに演技だ。

「え、え、え？」

私の様子に、陸は言いようのない不安を覚えたのか、激しく動揺
の言葉をもたず。

いい感じだ、むふ。

「……………」

黙して陸を半眼で見つめ続ける。

こういう時は、下手に罪を暴き立てたずせずに、ジッと待つのが
得策というものだ。

「お、俺何かしたのか……？」

私の沈黙の視線プラス自分自身の言いようのない不安に耐えかね
ず、陸が尋ねてくる。

(フッフ……もはや紫苑ちゃんワールドの虜だな)

内心でほくそ笑むと、仰々しくため息をついてみる。

「……覚えてないのか？」

陸に鋭い一瞥を投げかける。

「な、何……が？」

陸は緊張した面で、私を見る。

瞳は不安に揺れに揺れまくっているという具合だ。

やれやれというのをたつぶりと込めた溜め息をつき、一気に淡々と嘘の説明を陸にしてやる。

「お前は未来の妻を愛するという証明のように私をきつく抱擁し、

さらにその後、陸は、自分の顔を躊躇なく私の87センチの胸に、グリグリと発情期の野獣のように押し付けて蹂躪し、あげく私の匂いを嗅ぎ、よだれをたらす始末だ」

陸は嘘の説明に顔を真っ青にする。

眼は恐ろしいものを見たかのように見開き、麻薬患者の薬切れのように歯をカチカチと打ち鳴らす。

(むづ……そこまで真に受けられると罪悪感が……)

そもそも陸は私を抱き締めていただけだ。

しかも、それから後のことは私がやってたことをさも陸がやったことのように捏造した……というのが実情だ。罪悪感を抱かないわけでもないが、まあ政治家も国民ないがしろにしたい放題であるし、構うまい！

「お、おおお、おおお俺がそんなことをツ！？」

陸は戦慄に身を震わせる。

ああ……つ。だがしかし！……フッフ、この戦……もらったな！
「すみません！ すみません！ ごめんなさい！ う、生まれてきてごめんなさい！」

「まあ……反省しているようだし……」
必死の形相で土下座を繰り返す陸へと鷹揚に頷いてやり、そのくせ要求する。

「その代わり……私をどこかに連れて行ってもらおう！」
巧みにデートの約束へとこぎつける。

ふう、たまに自分の頭脳の冴えに戦慄を感じるでござる。

「……………う、海で……………どう？」
暫し黙考していた陸がおそろおそろという感じで尋ねてくる。
(海か……………)

天井に視線を彷徨わせ、シミュレーションを開始する。

海 水着 露出度少ない 紫苑ちゃんの色気

陸クラクラ

「ラヴ チュヤンス () () b

「よし海だ！ 海で万歳！ 海はサムライ！ 一芝居ひとばし打った甲斐があるというものよ！ 作戦成功でござる！」

瞳を輝かせ、右拳を天に届けとばかりに振り上げる。

そしてグツと右の親指を立てる。

「ちょ、ちょっと待て……一芝居と作戦成功っていうのは……どういうことだ？」

「う……」

背中に嫌な感じの汗を浮かべる。

調子に乗って内心の考えを暴露してしまったようだ。

「それになんか、俺の胸元がよだねのようなもので濡れてるし、なんか胸のあたりがすりつかれたように赤くなってるんだが……何か俺……また騙されてないか？」

陸は半眼で呟く。

ぬ、ぬう！ ここは押しの手で行くしかあるまい。

「いや、気のせいだ。使用後のつまようじくらいどうでもいいことだ」

「それは確かにどうでもいいけどさ……」

釈然とせずに首を捻る陸。

そんな陸の内心の疑念を払うように、大声で叩きつける。

「ならば海に行くのだ！ 絶ええっつ対いに海に行くのだ！ 必ず

海に行くのだ！ 何が何でも海に行くのだ！ チャンスなのだ！
ラヴなのだ！」

陸の胸倉を掴み、鬼気迫る表情で陸に詰め寄る。

「何が何だか良く分からんのだが……」

「ええい！ とにかく海に行くことに決定多数だ！ 記憶にござい
ませんだ！ その案件は担当のものに一任しているので私には関係
がございませんだ！」

駄目押しの一言を放った瞬間、ガチャリと、音をたてて海殿が部
屋に入って来た。

「俺のこと呼んだと思って、来たんだけど……」

そこでいつの間にか陸を押し倒している私を見て、陸の顔を見る
と、表情を変えずに海殿が尋ねてきた。

「もしかして……取り込み中？」

「うむ。その通りだ」

とりあえず、海殿には肯定の返事をしておく。

と、陸は自分の今の体勢に気が付いたらしく、慌てて弁解しだす。
「ち、違うツ！？ 違うぞ海！ これは、これは罠だ！ 策略だ！
そもそもおかしいじゃないか！ そういうみだらな行為を朝にや
るわけがない！ 紫苑が俺をハメようとしているんだー！ 言うな
らば、これはテロだ！ というか海と連呼して第三者を呼んだのが
その証拠ッ！」

某死殺ノートの真犯人の形相で、陸は叫び、海殿は首を傾げる。

「俺、誤解した？」

「いや、全然誤解していないぞ」

今度は私が海殿の質問にきっぱりと冷静に否定しておく。

「紫苑！？ 何をい……フムウ！？ フグフグ、ソムウ！？」

「海殿の見たもの……それが全て真実だ。某人気探偵ものアニメの
コンも言っているだろう？ 『真実はいつも一つだ！』とな」

暴れる陸を組み敷き、口を押えてしゃべらさない。ええいしゃべ
らすものか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9105x/>

なんでやねん！

2011年11月7日09時03分発行